コミュニティ

The Community

5

家庭のしつけとコミュニティ

1973　財団法人　地域社会研究所

コミュニティ

The Community

5

家庭のしつけとコミュニティ

財団法人　地域社会研究所

1968

発刊のことば

（創刊号から）

人間は、ひとりでは生きてゆかれない。つねに多数の他人とともに、助けあって生きてゆく。その生活、職業、学問、趣味などにおいて、なにごとによらず志を同じくする人間の集団はこれをコミュニティと呼ぶ。人間は今日まで、あらゆる工夫を凝らして、いろいろな形のコミュニティをつくって、その中に生きてきた。これからさきも、人間のあるかぎりその努力はつづけられるであろう。

日本人もまた、古来いろいろなタイプの集団生活を経験してきた。しかし、その大部分は、封建的な社会制度を土台としたコミュニティであって、個々の自由な人間を平等に扱ったものではなかった。さいきん新しい日本になって、初めて民主的なコミュニティを形成すべき責任を負ったわけであるが、まだ、旧来の慣習と惰性にも力強いものが残っているし、新しい観念の理解もいまだしの感が強い。

そのために、形のうえにおいて民主的社会となったわが国も、その実においては、いまだ空虚な状態であるといわざるをえない。いかにして良い民主的なコミュニティをつくるかということこそ、今日、日本人が直面している緊急課題である。

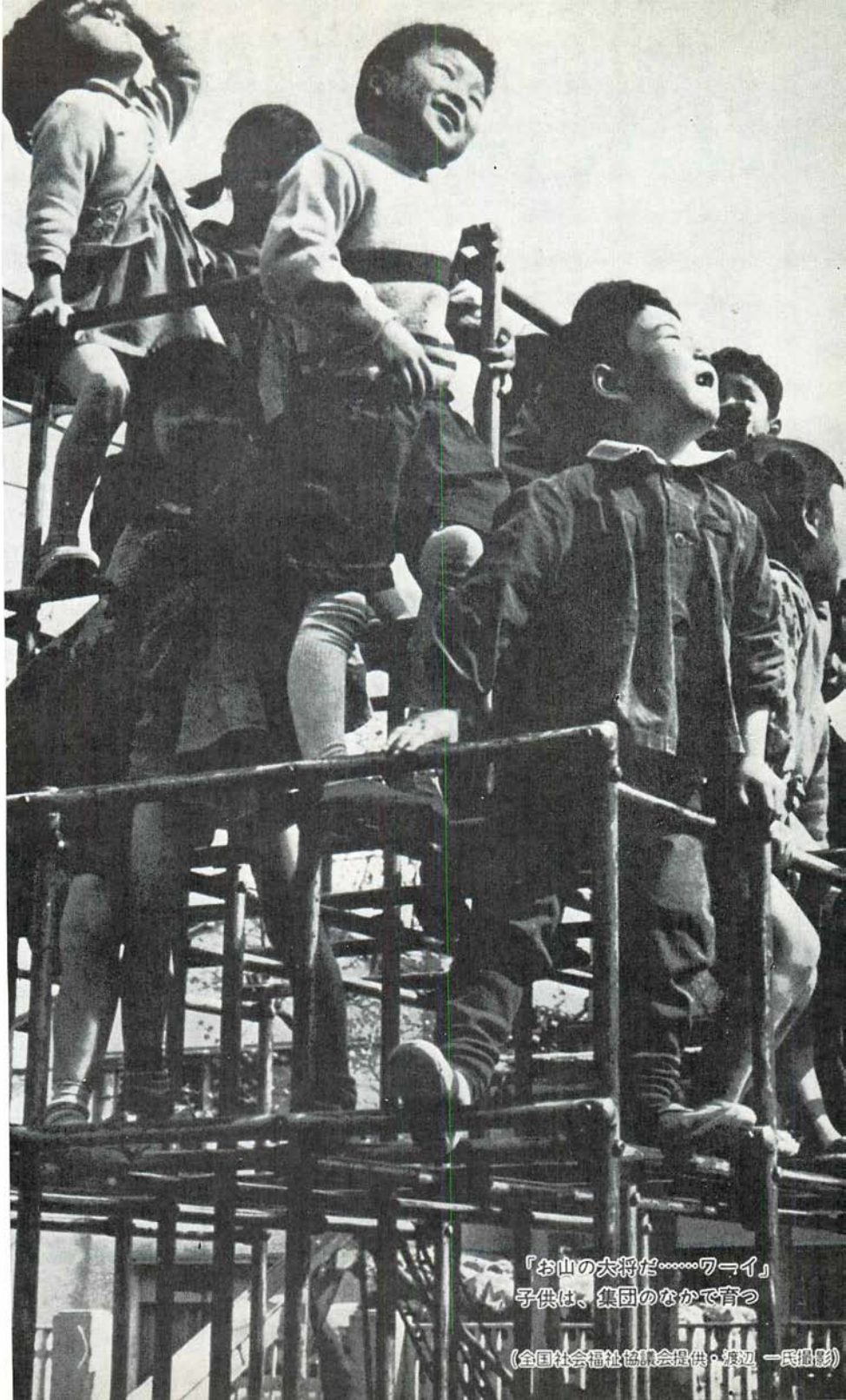
財団法人地域社会研究所は、この問題と取り組む目的で創立されたのであるが、国民全般にコミュニティの観念とその意欲がはなはだ薄いことが、もっとも基本的な問題であることに着目して、まず活動の第一歩として、きわめて平易で通俗的な叢書の刊行を計画した次第である。

叢書の名称を「コミュニティ」と定め、今後、各分野にわたる基礎的な知識の普及を目指して、つぎつぎとこれを取り上げて刊行をつづける予定であるが、われわれの念願のごとく、この叢書が、広く国民の間に多少なりともコミュニティの概念を植えつけてゆくことに役だつならば、誠に本懐の至りである。

昭和39年春

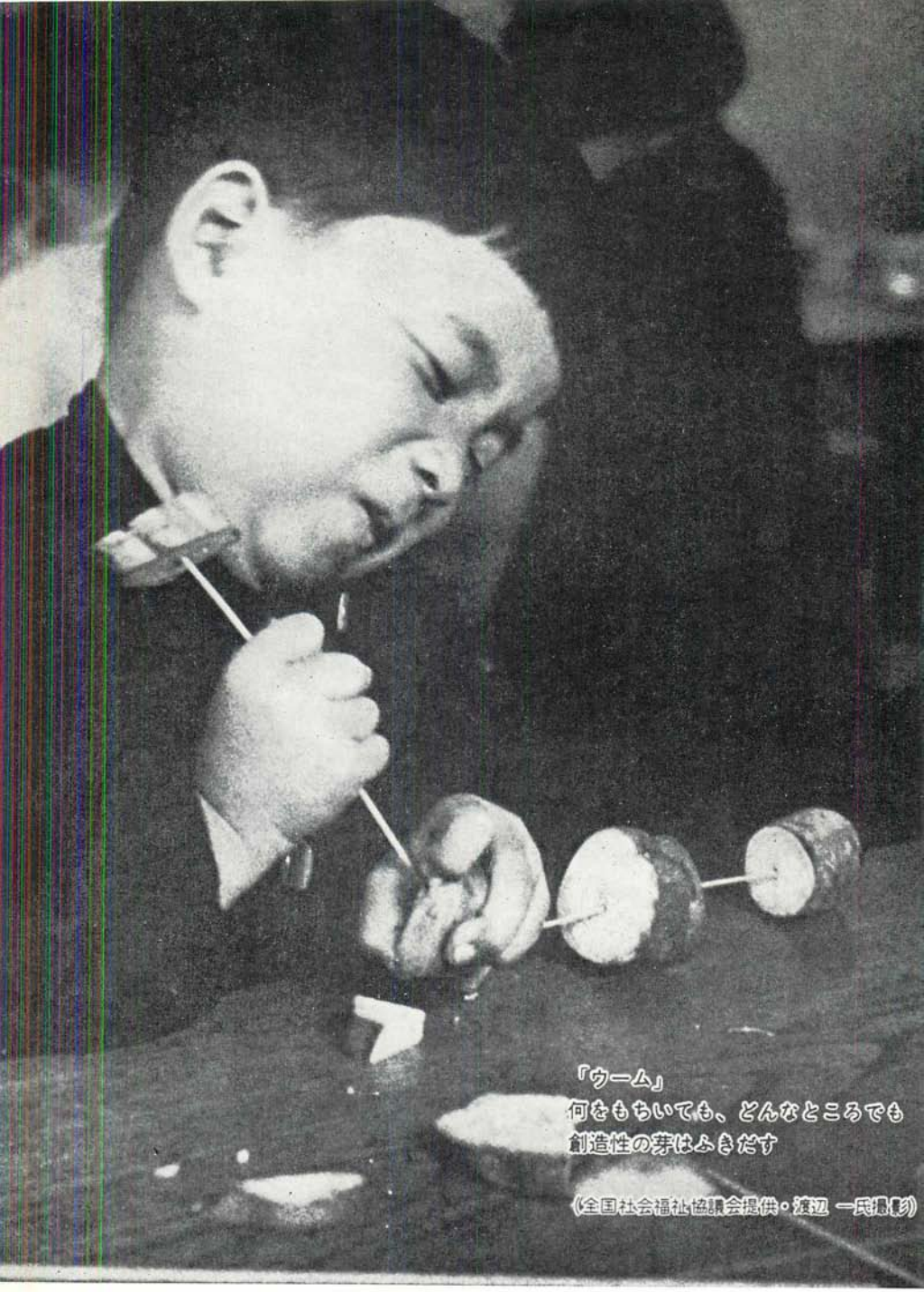
財団法人　地域社会研究所

理事長　矢野一郎



「お山の大将だ……ワーイ」
子供は、集団のなかで育つ

（全国社会福祉協議会提供・渡辺　一民撮影）



「ウーム」
何をもちいても、どんなところでも
創造性の芽はふきだす

(全国社会福祉協議会提供・渡辺 一氏撮影)

目　　次

第1部〈報告〉

「家庭のしつけ」はどうあるべきか……波多野勤子

Ⅰ　子どものしつけ方……6

Ⅱ　日本の家庭のしつけの現状……13

Ⅲ　しつけの目的……20

Ⅳ　おわりに――コミュニティの共同目標と新しい家風……25

付　　表

第2部〈座談会〉

家庭のしつけの問題点

Ⅰ　「しつけ」のむずかしさ……37

Ⅱ　コミュニティ・家庭生活・心のふれ合い……49

Ⅲ　「しつけ」における父親の役割り……61

Ⅳ　老人と家庭のしつけ……73

Ⅴ　発達段階に応じた「しつけ」……81

Ⅵ　学校教育と家庭教育……89

Ⅶ　新しい「しつけ」への提言……99

付　　表

第1部　報　告

「家庭のしつけ」はどうあるべきか

波多野勤子

I　子どものしつけ方

誰でもわが子を立派な者にしようと願っています。そこで、あれこれと世話をやき、しつけをしていくわけですが、この際にまず考えてみなければいけないのは、

①誰が　しつけるか、
②どう　しつけるか、
③どこで　しつけるか、
④いつから　しつけるか、
⑤どのように　しつけるか

の五点です。

誰がしつけるか　子どものしつけは、特別な事情がない限り、両親がしつけていくのが、ほんとうです。と申しても、父親はたいてい家庭の外に仕事をもっていますので、実際に多く接するのは、どうしても母親ということになります。

そこで、子どもをどうしつけていくかは、子どものいない場所、たとえば夜、子どもが寝たあとなどに、両親がよく話しあって大きな方針をきめたいものです。子どものいないときをえらぶのは、最初から両親の意見が

一致すると限らないからで、自分たちの子どものことですから、夫も妻も十分自分の気持をいって、お互いの了解の上で、しつけの方針をしっかりきめることが大切です。

この方針がしっかりしませんと、実際に扱う母親の態度があやふやになって、時には父親の意見にしたがい、時には自分の考え方で子どもを扱うといったことになります。このように母親が一貫しない態度ですと、相手が幼児の場合、一層とまどって、善悪の正しい判断も育たず、よい習慣もつきません。

また、もう少し大きくなってからでは、母親を馬鹿にするようになったり、性格にかげひなたができてくるようにもなります。

夫と妻との意見が一致しないと父親はとかく子どもの前で母親の意見を否定したり、母親のしていることを叱ったりします。こうなりますと、ますます母親への信頼度は低くなってしまいます。よいしつけをし、よい社会人に育てようと思うならば、まず夫と妻で、子どものしつけに責任をもつという態度をはっきり自覚しましょう。

どうしつけるか　次にどうしつけるかを具体的に考え、そして大方針をきめましょう。

○夜はきまった時間にちゃんとねかせよう。

○お父さんやお母さんが、誰かと話をしているときには、口出ししたり、そばでさわがないしつけをしよう。

○おもちゃや絵本は、やたらにおみやげとして買いあたえないで、土曜日とか月給日とかきめた日に与えるようにしよう。

○子どもが、だだをこねたり、やんちゃをいったときに、それにまけないようにしよう。

○自分のことはなるべく自分でやらせよう。

こんなふうに、夫と妻とでお互いに具体的にしつけたいことをいくつかいいあって、その中から、まず実行することを二つなり三つなりをえら

び、それはどんな場合でも守るようにしていくことにしましょう。

このように具体的な小さな問題を先に考えて、そこからこのようにしていけば、どういうしつけができるか。その結果、どういう子どもに育てていくかというふうに話しあってもいいし、逆に、他人にめいわくをかけない習慣をつけよう、自分で考えてやる習慣をつけよう、などと、根本的なものを先に考えて、ではそのために毎日の生活では、どういうようにしていこうかと考えてもいいのです。とにかく、このようにして夫と妻が自分たちの子どもの育て方を、まずしっかりきめます。

きめたら、母親は子ども可愛さにまけたり、面倒くさがったりせずに、それを毎日実行することです。また、父親はときには母親のやり方にまちがいがあっても、子どもの前ではそれを問題にせず、子どものいないときにたしなめることにしていきたいものです。それでこそ、はじめて子どもはしっかりと育っていきます。

しかし、両親の意見で育てるといっても、家族の人たちの意見を絶対に取り入れないというのではなく、よいものを取り入れていくことはいうまでもありません。

どこでしつけるか

さて、子どものしつけはどこでしつけていくべきでしょうか。こんなことをいうと、おかしなことをきく、子どものしつけは生活の中でしつけるのが当然ではないか、と反ぱくなさる方も少なくないと思います。全くその通りです。

しかし、その「子どもの生活の中」ということばのもつ内容をはっきり把握されている親は案外少ないようです。ですから、ふだんの生活の中では、よくしつけるように努力されている両親でも、来客があったとき、あるいはたまにいっしょに外出したときには、つい例外を認めてしまうことが珍らしくありません。

しかし、来客があることも、外へ出かけることも、子どもの生活の一部

なのです。むしろそういうふだんと違った場においても、しつけるべきことは、ちゃんとしつけること、これが大切だと思います。せっかく来たお客さまのまえで子どもを叱っては失礼になると思って遠慮したり、ピクニックに出かけると、自分たちがたのしむことが先になって、他人のめいわくを考えない行動を、親が許したり、時には親が先になってしたりすることがないでしょうか。こんなことでは、よいしつけはできません。

しつけは、例外なしに行なう、そしてくりかえしくりかえし行なう、というところから育っていくものなのですから、いつでも、どこでも、必要なときに、しつけていきましょう。

したがって、折角親が叱っているときに、“まあまあ”と無責任なとりなしをそばからすることは、当然ひかえるべきであります。

いつからしつけるか

子どものしつけはいつからかということでは、おとなの頭の理解と、実際の行為の間には、かなりのひらきがあることが多いようです。

アンケートをとりますと、子どもは生まれてすぐからしつけていくのがほんとうだ、というところに○をつける人が最も多く、おとなのいうことばが理解できるようになってからしつける、がこれにつぎ、学校へあがるようになってからしつけるというのは、少数しかありませんでした。

子どもは学校へあがるようになるまでは、お客さまのようにただ大切にし、入学と同時に、しつけをきびしくしていけばよい、と考える人が多かった明治、大正の時代からみると、観念的には、両親は非常に進歩しているわけです。しかし実際はどうでしょうか。生まれてからの１・２年は、両親は、ただ病気をせず無事に大きくなることばかり願って、心のしつけのことなど念頭にないように思います。長男の甚六型、ひとりっ子や末っ子の甘えん坊型、神経質な子どもなどは、生まれつきもありますが、環境、家庭における取扱いや人間関係から出来あがってくるものが少なくありません。

いいかえれば、適当なしつけをせずに育てていったために出来てくることが多いのですが、このように実際面では、しつけは赤ちゃんのころは忘れられています。そして幼稚園へいくようになってから、やっと親が気にしだすというのが一般の家庭のように思います。

しかし、これではいけないので、しつけは生まれたときからまず環境を整備し、その取り扱いを通じて、たくましく丈夫な子、誠実な子、心のやさしい子、自分をコントロールできる子等になるように、親はその子の特徴を生かしつつ、社会として必要なしつけを、だんだんとしつけていきたいものだと思います。

どのようにしつけるか

これでは四つのことを注意していきましょう。

第一は、その子の発達と心の状態に応じたしつけをすること。

第二は、機会をとらえて、しつけていくこと。

第三は、しつけは、くりかえしくりかえし行ない、例外をつくらないこと。

第四は、その子の特徴をのばすように、しつけていくことです。

第一の発達に応じたしつけ、という場合、忘れてはならないのは、1歳でしつけるべきことを、しつけそこなったとき、その後なら2歳でも3歳でも、それをはじめていいというものではない、ということです。

例をひとり寝にとってみましょう。

最初からひとりで寝つけた子どもは、そばにおとながいると、かえってねつきがわるくなります。そして、別に母といっしょに寝ようともしません。

ところが、満1歳以上まで母のふところに抱かれて寝る習慣のついた子は、もう母の肌のぬくもりのたのしさを知っています。ですから、2歳すぎたころに、急に別に寝かせようとしますと、寝つきがわるくなったり、

何か人形やぬいぐるみを抱かないと寝られなくなったり、指をしゃぶらないと眠れないということもおきてきます。

これでは、ひとり寝という習慣をつけたとしても、決していい結果にはなりません。まして、下の子が生まれるので、急にひとりで寝かせるようにしますと、母を赤ちゃんにとられるさびしさと重なって、よけいおもわしくない結果にもなるでしょう。

ですから、1歳すぎまで母といっしょに寝てきたのなら、その次のよい機会を待つことにして、それまではいっしょに寝ていく方が他の面でよいしつけができます。このように子どもの発達と心の状態にあわせて、しつけをしていきましょう。

第二の機会をとらえる方法について、いまのべてきたひとり寝を例にとってみましょう。

2歳まで母親といっしょに寝てきた子どもでは、いわゆる反抗期といわれる時期、何でもおとなのように自分でやりたがるときが次の機会です。もし、外でよくあそび、運動も十分するようになって、寝つきもよいようだったら、できるだけおとな扱いをして、このときにしつける工夫をしましょう。しかし、このときにうまくいかないようだったら、無理せずに、幼稚園へあがるときを待ちます。その次は、小学校へあがるときです。このように、子どもの心に、おとなになろうとする欲求が強くおきているときを機会としてとらえると、ひとりねの習慣は、そう骨をおらずにつけることができます。

これは一例ですが、このようにして、しつけの最初は、子どもがすすんでやるような機会をとらえることです。

第三、こうしてはじめられた習慣は、毎日忘れずにつづけていきましょう。なるべく例外をつくらないようにして、だんだん子ども自身努力しないでも、まわりからさいそくされなくても、できるようにしていきたいものです。しまいに、そうしないではいられなくなるほど、たとえば食事の

前には手を洗わないと気持がわるいまでに、その習慣が身についたら、それこそ大成功といえましょう。

第四、しかし、しつけは、あまり神経質に扱ってはいけません。こうしなければいけない、ああしなければいけないといわれたのでは、子どもは次第に萎縮し、それができないといって叱られることが多いと、自信を失ってしまいます。自信を失うのは、伸びがわるくなる大きな要素です。

子どもには自信をもたせましょう。

どの子にも、何かいいところ、優れたところがあるものです。

それを認め、伸ばすようにしむけていくと、子どもは素直な心の持主となり、しつけも素直にうけ入れていきます。

子どもをよい子にしようとあせって、注文を出しすぎてはいけません。よいところを見出し、その特徴を認めながら、気長にしつけていきましょう。

Ⅱ　日本の家庭のしつけの現状

家族制度の崩壊

敗戦が日本にもたらした大きな変化はいろいろあげられましょうが、家族制度が破壊され、家庭の単位が夫婦に移ったのもその一つだったと思います。

そのため、従来は○○家の子どもとして恥ずかしい、というふうに家の体面からきびしくしつけられたものが、急に取りはずされました。もう個人個人は平等ですし、家とのつながりを考える必要もなくなったのですから、家柄についての誇りと責任が中心になっていた従来のしつけもなくなってしまいました。

民主主義のはきちがえ

それと同時に、民主主義というものを頂戴したのです。この民主主義が、何しろ急にもらったものであり、日本の中に次第に育ったものでないだけに、そのほんとうの在り方を理解せず、ただ自由に、子どもたちを放任することがよいのだと曲解したり、個人を尊重するという点に重点をおきすぎて、たとえば子どもがきまりを守らなくても文句をいわないのがよい親や教師であるかのように考える人がたくさんできてきました。

親の自信喪失

その上困ったことには、親たちが従来習ったことは、大部分間違っていたのだということになったのです。

歴史は間違っていたというし、漢字や仮名づかいはかわってしまうし、いままでは、従順が美徳とされていたのに、今度は目上の人にむかっても

自分の意見をはっきりいうのがいい子なのです。

こんなわけで、親は自分のもっていた善悪の物指をなくしてしまった状態になりました。これでは、子どもに何一つしつけようもありません。

親は子どもの扱いに対して、全く自信を喪失してしまったのです。

子どもへの期待とマス・コミの影響

しかし、何もなくなってしまった日本にとって、頼みとするものは将来の日本人、すなわち子どもです。子どもに期待をかけよう。この気持は期せずして日本中を一つにしました。

教育がどんどんさかんになり、教師ばかりでなく両親も教育に熱中しはじめました。

これに対応して、雑誌・新聞・ラジオ・テレビでも教育としつけを、いろいろな面からとりあげつづけてきています。一流の人々ばかりでなく、少しでもこの方面に経験のある人は、ひっぱりだこになって教育問題をはなし、また書く、そして日本中の親は、それらのあまりにも多い異なった意見のために、ノイローゼ気味になっているというのが実態のようです。

教育ママと放任ママの両極化

育児の知識がありすぎて、かえって子どもを神経質にする、いわゆる教育ママがあちこちにでてきましたが、そうかと思うと、個人主義の立場をとり、自分のたのしみを第一とし、子どもを放置しておいていいのだという態度の母親もでてきました。

それから、子どもは大きくなればわかるのだからというわけで放任し、たまにある学校の集まりにも出てこないママも生まれてきております。

もちろんこの中には、家業がいそがしくてやむを得ずこうなっている母親もありますが、概してこのように親、ことに母親は、どちらの方向にしろ、極端な態度をもつようになりました。

これが戦後の新しい現象のようです。ことに教育ママとよばれる人々は、子どもにすべてを期待し、少しでもいい人に育ってほしいと夢中で

す。

その結果はどうでしょうか。

優秀コースへ殺到

こういうおかあさんたちは、しつけはさておき、まず子どもをいい学校に入れ、そして一流のよい勤務先にはいれるところまで努力してやろう、女の子ではいい結婚まで、無傷でいられるよう面倒をみてやろう、ということに熱心になりだしました。

当然、子どもに対して手を出しすぎてしまいます。高校入試どころか、大学入試にまで母親がついてくるようになったのなどは、この親の態度の一つのあらわれでしょう。戦前には予想もしなかったことでした。

学校と家庭の機能の逆転

そして、子どもの能力が十分に発揮される環境におかれているかどうかなどを考えるひまもなく、学校の成績だけを中心にして、わが子をはげましつづけるのです。塾に通わせたり家庭教師をつけたりもします。

このように、学校でやるべき勉強のことに夢中になり、当然、家庭でやるべきしつけの面については、むしろ先生に期待し、先生が叱ってくれなければうちの子はどうにもならないとか、先生の指導がわるいから非行化がはげしくなったなどと平気で口に出し、またそう考えている親がいかに多いことでしょう。つまり、これでは逆だということに気がつかないのです。

成績偏重主義

その上、学校の成績に一喜一憂し、わが子の価値もそれで決めてしまおうとする傾向も強いようです。

大勢の子を一度にあずかる先生ですら、たいていは、子どもを成績だけでみようとせず、その子その子のよい面を見出そうと努力しているのですから、まして親は、わが子に対してこの努力をぜひしていきたいものだと思います。

それに子どもの中には、実力があるのにその実力を学校の成績に出しきっていない子も１クラスに３人や４人は必ずいるのですから、子どもの成績表をみるとき、そのことも親はぜひ考慮に入れて、学校以外の日常生活のあたまの回転の具合なども参考にして、わが子が、果たして実力を十分発揮しているかどうかを考えてみることです。

アンダー・アチーヴァとオーバー・アチーヴァ

このように実力があるのに学力（アチーブ）が低い子を、学者たちはアンダー・アチーヴァとよんでいます。逆に、知能検査をしてみると低い能力しかもっていないのに、そのわりによい成績をとる子をオーバー・アチーヴァといいます。

オーバー・アチーヴァは、努力によって実力以上の成績をとっているのですから、たとえその成績が中位でも、それ以上はのぞまぬことです。こういう子を学業成績だけみて、もっと勉強させてもう一層よい成績をとらせようとしたり、進学の際に成績がいいからといって一流校をうけさせたりしますと、能力の限界をこえることになりますから、かえって成績がさがってきます。それに伴なって自信もなくすので、思わしくない結果をまねくようにもなります。

アンダー・アチーヴァの場合は、まずその原因を探しましょう。それには、身体的欠陥が原因である場合もあるし、先生との間がうまくいかないとか、家庭の扱い方に問題があるとかいった場合もあります。

子どもについては、まずそのほんとうの姿を早くつかみましょう。それが、よいしつけのできる近道ですし、子どもを特徴ある、しかも立派な社会人にするのに役立ちもします。

調査による親の「つもり」と子どもの「評価」

それなのに、多くのおかあさんはそのことを忘れているのです。いえ、いまの子どもは親のいうことをさっぱりきかない、母親を馬鹿にしきっているとなげき、しつけ

ようもないので放っています、ともいいます。

しかし、ほんとうにそうでしょうか。

日本児童研究所が小学生について調べてみましたところ、面白い結果がでました。

この調査は都内山の手2校、下町2校、計4校の小学校5年の児童と、3年生・5年生の母親で30代および40代のものを対象として、昭和38年7月と10月に日本児童研究所の行なったもので、質問紙法、面接、集団討議など多角的な調査法を用いています。質問紙調査の結果の一部を表にして巻末につけておきますからご覧ください。この調査によりますと、結論はつぎのようになります。

（1） 家庭ないしは家族の幸福ということが、子どものイメージや理想の中核になっている。

（2） 家庭における親子の関係は、たての関係（権威）というよりも、よこの関係（親和）に近づいてきているようである。とくに母・子関係に関してこのことがいちじるしい。

（3） けれども、親の位置についての親子の認知にはずれがある。子どもにとっては、親しさは増したといっても、やはり親は親であるが、一方親からみると、今の親はすっかり権威を失ってしまったと感じられている。

（4） 子どもは、親を子どもなりに大切にし、親孝行をしたいと考えているが、その親孝行の内容が、昔に較べて変わってきているようである。つまり、より合理的に、より物質的にである。一方、このような子どもの気持とは別に、母親は子どもは親不孝だとしている。ここにも親子のずれがみられる。

（5） 子どもは両親（ことに母親）から、日常生活のしつけにおいて、かなりこまごまとした注意を数多くうけているとしているが、その母親自身は、しつけの基準を失っているし、しつけの意義も明確には把握

していない。まして、積極的にしつけについて考えているものは、ほとんどない。

（6） 母親のとらえた子どもは、積極的で、テンポが早く、ものごとにこだわらないという特徴を備えている。一方、母親自身は、そういう子どもをうらやましいと感じ、強く現実を肯定している。

ざっとこんな調子です。

うるさいけれどもやはり親は親

子どもは決して親をバカにしているつもりはないらしく、やはり、親は親として高く評価しています。そして、何にもしつけられないから放っているというママは、静かにしなさいとか、行儀よくしなさいとか、勉強しなさい等、実際には子どもにうるさく要求を出しているようです。

あまり要求がつぎつぎにでるので、むしろうるさいママとしてうけとられていることが多いのではないでしょうか。

これは母がしつけの根本のことより、枝葉の目先のことをしつけようとし、それについて、いちいち叱言をいっていることを示しているように思います。

人間形成への要望

以上のような実状の中で育った子どもたちも、もう成人式をむかえるようになりました。そして、新教育の成果が次第にはっきりと子どもたちの上にみられるようになってきたのです。

新しい教育をうけた子どもたちは、ひと頃、おとなたちが心配したよりずっとしっかり育ってきたようです。真面目である青年も少なくありません。

しかし、何か足りないのです。知識はたしかに豊富になったし、社会性も育った。しかし、人格形成の上で、何か一本足りないものがある、とみんなが考えるようになりました。

「期待される人間像」

これに池田内閣の「人づくり」政策が大きな刺戟となって、一方では根性論が新聞や雑誌の紙面をにぎわすようになり、また、先般は文部省の中央教育審議会から「期待される人間像」の中間報告がでるといったことにもなりました。

この「人間像」については、いろいろ意見も問題もあると思いますが、まだよくねりあげていないものを、中間報告の形で報告しなくてはならなくなったというのは、社会全体が何か日本人としてのイメージづくりをしたいという欲求を強くもちはじめた一つのあらわれとみることができます。

根性論

オリンピック東京開催をけいきにして、根性論が一層さかんになり、これが一般に肯定されるようになってきたのも見逃せない事実です。

この根性という言葉は、戦前は悪いときに多くつかわれました。根性がわるい、根性がまがっている、根性をたたき直してやる、といったふうに使われたものです。根性のある人は、信念のもとに自分をまげない人でもあるので、戦前の生活の中では、目上の人たちにとって面倒な存在であったから、こんなふうにいわれたのでもありましょうが、今日の社会では、これが必要な人間になってきています。

信念にもとづいて目的を達するまでがんばりぬく。この力を子どもたちの中に育てていこうという空気が、このところ、とみに強まっています。

この根性がなければ国際的舞台ではやりぬけない、日本を一流にすることができないなどと考えられてきています。これは真実でもありましょう。

しかし、それが子どもの能力や体力を無視したものであってはいけないことはいうまでもありません。

Ⅲ　しつけの目的

さて以上しつけ方と日本における現在のしつけの実状についてみてきましたが、そのしつけの目的は何でしょうか。この最も大切なことを、しめくくりとして考えていきたいと思います。

親の願い——よき社会人となること

どこの家庭をみてもたいてい、両親は子どものために一生けんめい努力しております。そのやり方は必ずしも適当でないとしても、とにかく子どものためになろうとし、そのためには自分の身を犠牲にしても悔いないほどの愛情をもっています。そして、子どもが幸福になることを何よりの願いとしています。

両親たちに、子どもを将来どんな人に育てたいかとききますと、10人が10人とも、社会人として立派な人になってほしい、幸福な社会生活、家庭生活をおくって欲しいという答がでます。これは全く正しい答であろうと思います。

そこでもう一歩つっこんで、では社会人として立派な人とはどんな人かとききますと、社会の役に立つ人であり、他人によろこばれる人であるといった答がでてきます。

多くの母親は「社会」を自分の住んでいる世界とは別に考えている

けれども、では、その目的にむかってどんなしつけが日常行なわれているでしょうか。

そういう社会人になるためには、まず家庭の中で、自分の責任を果たし、協力していく人間となって、

その習慣を身につけなければいけないのだということには気がついていない親が、案外多いのが実状のようです。

なぜなら、そのようなことを強く願う母親ほど、家庭では子どもに対して過保護であり、学校の勉強中心主義、成績第一主義で子どもを扱っている傾向が強いように見うけられるのです。

こういう点からみますと、お母さん方がいっている社会というのは、現在自分たちが住んでいるところとは別なものを頭にえがいているのではないかとも思われてきます。それはあるいは一流の会社のことであり、成績優秀の人たちのみがいく官庁その他を指しているのではないでしょうか。

たとえ、将来はそういうところへいくにしても、まず家庭の一員としての責任を自覚するようなしつけができていなければ、社会に出ても立派な社会人とはなれません。

たとえ自分の望んだところへ就職したとしても、このように家庭でしっかりしつけられなかった人は、自分の気に入ったときだけやるとか、自分の得をするときだけやるといった人間になっていくことでしょう。

あるいは外ではよくても、家庭では暴君であるといった人に育つかも知れません。これではほんとうによい社会人とはいえませんし、真に幸福な家庭を築くこともむずかしいでしょう。

目をコミュニティや社会へ拡げよう

よい社会人となるためには、家庭内ばかりでなく、隣近所つまり自分たちの住むコミュニティの中で、まずよい住人でなくてはならないはずです。コミュニティ全体の機能が円満に活動するように協力する人であることが先決問題でありましょう。

こうして、コミュニティがそれぞれ、たのしいかたまりになることができれば、社会は自然に立派な社会になります。そういう社会に歓迎される人こそ、ほんとうによい社会人でもあるはずです。

またコミュニティが各々そこだけでかたまらず、お互いによき交流がで

きれば、文化もすすむでしょうし、そのような国家では、ひとりの権威者のために国全体が間違った方向にすすむ懸念も少なくなることでしょう。

こういう社会をつくるために、私たちは、そこに役立つ者として子どもたちを育て、しつけていきたいものです。これは決して他人のためのものではなく、個人の幸福もそこから生まれます。この点を私たちは、とくにはっきり認識して、子どもを育てていきたいものだと思います。

そして隣同志、近所同志がお互いにうまく生活していくためには、まずどうすればいいかを考えて、具体的な方針をさだめ、それによって子どもの日常のしつけをしていきましょう。

自分の子どものことばかり考えず、よその子のことも考慮し、また目先にとらわれず、遠い将来の社会を予想して、それに対応できる人となるよう一貫した、しつけをしていってほしいものです。

親のもう一つの願い——生命を大切にする

子どもが幸福な社会生活、家庭生活をすること、これはまず生命を大切にする、ということが基本になりましょう。こんなことはあたりまえのようでいて、案外うっかりしていることです。誰でも健康で長生きしたい、けがをしてはたまらないと思っています。家族の者についてはもちろんですが、他人に対してもそう思うのが普通の人情です。

しかし、それでいながら、私たちは実際には生命を大切にすることを忘れていることが少なくありません。それ以上に、健康を無視して仕事に熱中することを美徳と考えていることさえ多いのではないのでしょうか。

また、用心すればケガや事故をおこさないですむものを、うっかりしていることの何と多いことでしょう。

日本では人の生命が粗末にされすぎている？

先進国では、自他ともに生命を大切にする習慣が、かなり徹底してきているようです。「人身災害をおかしてまでやらなければなら

ない仕事は何もない」という文字が会社の入口にかかげられていたり、「人命は地球よりも重い」というコトバがいわれているのをみても、その様子がよくわかりますが、これにくらべますと、日本はまだまだ人命を軽視しています。他人の生命ばかりでなく、自分の生命を大切にする、この習慣をぜひ生活の中に育てましょう。これこそ親が願っている幸福な生活の根底をなすものです。

この精神を子どもの中に育て、そのよい習慣をつけさせるためには、まず母親自身が自分を大切にすることからはじめることです。母親が子どものためや家族のために犠牲になってひとりで無理をしつづけたりするのは決して美徳でないばかりでなく、家庭の幸福のためにも、将来の社会をになっていく子どもたちに生命を大切にするよい習慣をつけるためにも、よくないことなのだと、認識をあらたにしていただきたいと思います。

これは長い長い日本の習慣から抜け出すことで、母親自身としてはかなり努力のいることですが、そこに大切なしつけの根本があることを思って、お互いに実行していきたいものだと思います。

健康と安全がしつけの根本

どんなに忙しくても、母親は三分は自分の時間をもち、そして健康、安全という面から、家庭内の処理、しつけをしていくことにしたら、毎日のように新聞紙上をにぎわしている家庭内外の子どもの事故は、ずっと少なくなることでしょう。

あの大部分は、防げば防げるものなのですが、母親が家事に多忙なため、また母親の時間に区切りがないために、うっかりしていておこる例が多いのです。

母親が僅かでも自分の時間をもてば、そこに生活の区切りができます。健康面でよいばかりでなく、気分的にも余裕ができ、母親としてのなすべき仕事も能率的に処理できるようにもなることでしょう。

また、このようにして生命を大切にする習慣を身につけた子どもがおと

なになっていった時、産業災害もはじめてほんとうにその数を少なくすることができると思います。いくら設備をよくしても、監督者を多くしても、人命尊重の精神が徹底せず、特攻精神が残っているようでは、事故は防ぎきれません。

個人の幸福、社会の幸福ばかりでなく、産業を発達させ国家を繁栄させるためにも、ひとりひとりの家庭の安全教育、人命尊重のしつけは大事な大事なしつけだといえます。

Ⅳ おわりに
——コミュニティの共同目標と新しい家風

以上、人命尊重と社会人としてのしつけ、この二つは、人類に共通な欠くことのできないしつけでありますが、その具体的な指導法、しつけ方については、各家庭で、すでにのべましたように、年令に応じ、機会をとらえ、機会をつくって工夫していくことです。まず親が実行するのは、その中でも最も有効な指導法、しつけ方となりましょう。そしてこの二つを根底において、その具体策としてとくに重要視したい部分をわが家の特徴として、あるいはコミュニティ共同の目標としてすすめていきましょう。

たとえば、

「生活のリズムを生かそう」、「ユーモアを生活の中に取り入れよう」、「創造性を培うようにしつけていこう」、「人間工学の考え方をしつけの中にも取り入れていこう」

などいろいろ出てくると思います。しかし、こうしたコミュニティとしての共同目標、家庭としての特徴、いわば新しい時代の「家風」ともいうべきものを育てしつけていく際にも、同時にいつも忘れてはならないのは、子どもひとりひとりの実体です。どんな環境にあり、どれほどの能力をもち、どんな発達状態にあるか、そして優れた部分は何で、将来の問題となる種はどこにあるか、こういうことを両親がよくのみこんで指導し、しつけていくことです。わが子だからと、どの子も同じに考えてしまわないこと、子どもに平等にするということは、与える側からの平等ではなくて、むしろうけとる側の平等を重要視しなければならないことなどを忘れずに、親としての義務を果たしていきたいものだと思います。

付　　表

「大衆社会における親子関係」の調査結果

（日本児童研究所モノグラフ No. 2、1964年5月）
（よりその調査結果の一部のみをぬき出したもの）

○ 母 親 調 査

対象：都内山手2校、下町2校、計4校の小学校3年と5年の母親584名中、30代および40代の母親549名を対象とした。

時期：1963年7月

○ 子 ど も 調 査

対象：母親調査と同じ都内山手2校、下町2校、計4校の小学校5年生344名を対象とした。

時期：1963年9～10月

母親への質問とその回答

① 戦前の子ども、戦後まもなくの子ども、いまの子ども、それぞれについて、つぎの欄にあげてあるような性質のどれがあてはまるでしょうか。

項　　目	戦前の子	戦後まもなくの子	現在の子
1　基礎知識がしっかりしている	50.1%	10.2%	48.3%
2　問題解決力がたかい	24.9	12.8	63.6
3　常識がゆたかである	46.8	12.0	55.4

4	科学的知識を応用する力がある	6.7%	17.8%	85.3%
5	頭の回転が早い	7.6	20.9	62.2
6	科学的な態度がやしなわれている	4.7	15.7	83.6
7	よく勉強する	58.2	18.4	46.5
8	体力がある	32.1	20.2	76.1
9	運動・スポーツがうまい	16.9	25.2	83.7
10	美的センスがある	25.8	14.2	70.0
11	努力する	80.3	29.4	27.7
12	すなおである	82.2	22.7	25.1
13	明朗である	31.4	24.4	92.1
14	注意深い	55.2	24.8	39.6
15	きびきびしている	27.5	23.3	74.8
16	義理・人情にとらわれない	21.1	27.1	70.7
17	ものごとにこだわらない	11.6	31.3	85.8
18	自分で判断し、決定する	16.2	31.9	79.7
19	自分の意見をはっきり主張できる	4.6	34.4	93.1
20	現実的である	6.5	41.2	92.6
21	親孝行である	89.6	21.5	19.9
22	礼儀正しい	94.2	14.1	11.6
23	親のいうことをきく	93.1	19.9	14.8
24	友情にあつい	53.2	30.1	38.6
25	異性とも気がるにつきあえる	3.7	37.6	69.7
26	てつだいをよくする	84.0	30.1	25.9
27	目上の人をうやまう	96.8	17.9	9.7
28	身だしなみがよい	61.5	19.0	64.5
29	お金の使い方がうまい	21.0	26.3	67.9
30	社交的である	9.8	27.3	86.8

② おかあさまが、子どもだった頃にくらべて、今のお子さんは、どんな点がいちばん変わったと思いますか。よい点とわるい点をひとつずつあげてください。

よくなった点（上位10位まで）

1 はっきり自分を主張できる
2 明るく、朗らか
3 積極的である
4 自主的である
5 のびのびしている
6 知的に進んでゆたかである
7 社交性に富んでいる
8 科学的態度に富んでいる
9 合理的である
10 ドライである

わるくなった点（上位10位まで）

1 利己的で、自己中心的
2 礼儀知らず
3 りくつっぽい
4 長幼の序列がない
5 忍耐力がない
6 すなおでない
7 物をそまつにする
8 努力しない
9 打算的、がめつい
10 道徳心にかける

子どもへの質問とその回答結果

① あなたは将来どういう人になりたいと思いますか。

	項　　目	男の子	女の子
1	何かひとつの才能をのばして、世の中にみとめられる人	12.5%	14.3%
2	有名になることをのぞんで、一生けんめいにはたらき、勉強する人	5.4	3.9
3	金持になりたいと一生けんめいにはたらく人	3.6	0.6
4	出世や有名になるよりも、自分や家族の幸福を楽しみに働く人	46.7	59.2
5	出世の機会をのがさないように心がけるが、それをおもてにあらわさないで、毎日の仕事にはげむ人	8.4	2.7
6	好きな職業について、のんびりくらす人	9.0	3.9
7	自分の仕事のことは考えず、社会のために、すべてを捧げてはたらく人	4.8	1.9
8	どんなにめぐまれない仕事でも、それが社会の役に立ち、生活をささえていけるならば、よろこんで働く人	9.6	15.5

② あなたは大きくなったら、おとうさんやおかあさんになにをしてあげたいと思いますか。

1 楽しいくらし、らくなくらしをさせたい	33.4%
2 大きな家に住まわせたい、けしきのいい所に住まわせたい	13.8
3 おくりものをしたい、お金をあげたい	11.6
4 旅行につれていきたい	9.9
5 働いて恩がえしをしたい	8.1
6 一緒に住みたい	1.7
7 すきなことをさせたい	1.2
8 長生きをさせたい	1.2
9 親孝行をしたい（内容不詳）	16.2
10 その他	2.7

③ 次にかいてあるような行ないは、よいことだと思いますか。それともわるいことだと思いますか。

項目 ＼ 評価段階		A たいへんよいことだと思う	B どちらかといえばよいことだと思う	C よいともいえるともいえない	D どちらかといえばわるいことだと思う	E たいへんわるいことだと思う	F わからない
親のいいつけにそむくこと	山手	2.2%	1.1%	5.0%	24.0%	65.9%	1.6%
	下町	2.5	1.2	5.1	19.0	71.1	0.6
親に口答えすること	山手	1.6	2.7	6.1	28.4	58.1	2.7
	下町	0.6	1.2	5.5	16.0	74.0	2.4
自分がぎせいになっても親につくすこと	山手	39.4	19.4	20.5	4.4	1.6	14.4
	下町	50.3	13.4	17.7	5.5	3.6	9.2
なんでも親の許可をえてから、ものごとをきめること	山手	36.9	26.0	22.5	8.6	1.1	4.6
	下町	33.7	19.3	19.3	5.6	2.5	8.7

④ おかあさんには、いつもどのようなことを注意されますか。

家にいるとき	ケンカしないで静かにしなさい	36.7%
	勉強のこと	14.9
	整理整頓をしなさい	16.8
	外で遊びなさい	6.2
	おてつだいをしなさい	5.8
	行儀をよくしなさい	4.5
	テレビ、マンガのこと	3.9
	無　答	11.2
食事のとき	行儀について	48.2
	テレビをみながら食べないように	13.2
	偏食しないように	9.4
	あとかたずけをしなさい	5.4
	手を洗ってから	2.6
	ゆっくりよくかんで食べなさい	3.8
	無　答	17.4
よその家へいったとき	あいさつをしなさい	37.9
	行儀をよくしなさい	19.1
	静かにしていなさい	18.5
	その他	1.0
	無　答	23.5
勉強について	帰ったらすぐしなさい	29.4
	頭を集中してしなさい	27.6
	ていねいに字を書きなさい	10.8
	ながら勉強をしないように	7.3
	その他	3.5
	無　答	21.4

外出のとき	おそくならないように	37.6
	行先をいっていきなさい	21.7
	車や見知らぬ人を注意しなさい	20.9
	身なりをきちんとしなさい	15.8
	その他	4.0

⑤ おとうさんには、いつもどういうことを注意されますか。

勉強のこと	32.2%
さわがないように	27.3
手伝いをしなさい	22.8
いうことをききなさい	10.8
無　答	6.9

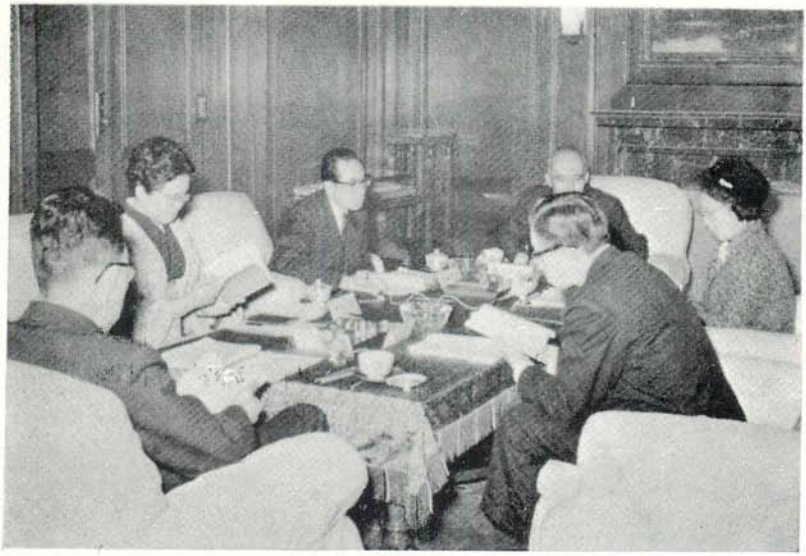
「チョット、じっとしていて」
心配ご無用、ハサミはプラスティックです

（全国社会福祉協議会提供・渡辺 一氏撮影）

勉強、遊び、マンガ、テレビ……
いつも子供は、したいことで一杯です

先生、友だち、親兄弟……
いつも子供は、いろいろな要求と
期待の接点にいます

（全国社会福祉協議会提供・渡辺 一氏撮影）



〈左から時実（後ろむき）、犬塚、青井、矢野、滑川（手まえ）、波多野の各氏〉

第2部

《座　談　会》

家庭のしつけの問題点

出　席　者　（発言順・敬称略）

波多野勤子　〈文博・母親乃学園理事長・児童心理学〉

滑川道夫　〈日本児童文学者協会理事長・東京教育大学講師・児童文化〉

時実利彦　〈医博・東京大学教授・東京大学脳研究所長・脳生理学〉

犬塚幸枝　〈主婦・東京都田園調布〉

司会・矢野一郎　〈当研究所理事長・第一生命会長〉

青井和夫　〈東京大学助教授・当研究所評議員〉

I 「しつけ」のむずかしさ

矢野　本日はみなさま、お忙しいなかをありがとうございました。

「コミュニティ」出版のねらい

この「コミュニティ」のだいたいのねらいは、日本人にいちばん欠けているものは、コミュニティという概念であって、今日国内でなにをやろうとしてもうまくいかないのは、結局、基礎においてそういうものが国民の心の中にないからである。

実は地域社会研究所を作った動機というものも、しあわせな明るい町や村をつくりたいということは、日本人だれでもがもつ念願であるんだが、それをつくるのにはいったいどうすればいいんだろうか。現在の日本じゃひとつもできてこないじゃないか。むしろ、どこの村も町もだんだん悪くなっていくばかりで、いい町ができていくという現実がないわけです。

そこでひとつ、そういうことを研究してみようという考えから、現在関係されている先生方にはすでにだいぶ前からご尽力いただいているんですけれども、コミュニティの研究にはいっていきますと、いちばんにつき当る問題が、まずコミュニティとはなんだということをみんなが知らない限りいくらいろいろのことを説いたってだめじゃないかということになる。

だから外国の人にはすでに身についていることであっても、日本人にはこれからコミュニティ理念というものが普及しなきゃだめだ、それを啓蒙して行くにはどうすればいいかということになると、通俗なもので、気長にみんなに読んでもらうしかない。そこでだれでも読めるようなものをテーマにして出していこうということから、みなさまのご相談ではじまりま

したものがこの冊子出版で、したがってそのゆき方も、だいたいどういう程度の方がお読みになっても理解できる内容でむずかしくないものとし、しかも最初に、どなたかその冊子でとり上げた問題の、ご専門の方のお話を、メイン・レポートという格好で掲げて、その方のお話を軸にして座談会をやる。その座談会も、どんなところへ脱線していってもかまわないという、自由な話の形で自由闊達な座談会として、だいたい100ページぐらいの雑誌にまとめるという方針でやってきておるわけです。きょうはその第5号の座談会でございます。

そういう会でございますが、私が理事長ということだもんですから、しろうとですけれども、司会をすることになっておりますので、お許し願います。それで各座談会のときには、私をたすけていただく方が一人、サブ司会者として加わっていただくことになっておりまして、今回は青井先生にお願いしております。

いままでの例に従い、まず第一に、先般の波多野先生のお話が、いちばん先の報告ということになっておりますので、まずそれがどういうお話であるかということを簡単にでもお話を願いますと、あとのお話の根になるかと思いますので、どうぞよろしく願います。

児童心理学への関心

波多野　私には男の子が4人おります。長男は昭和6年生まれですから、もう33歳ぐらいになりましょうか。次男は目下大学の助手、三男、四男はただいま大学生になっております。この4人の男の子のほかに、里親としてふたりの女の子をあずかりまして育てました。

ひとりは幼児から小学校1年生まで、もうひとりは幼児から中学1年まであずかり、子どもたちときょうだいのようにして育ててまいりました。ふたりとも、生みの親の生計がなりたつようになりましたので、もどしてしまいましたが、このふたりについては、むしろ自分の4人の子どもよりも苦労したことが多いように思います。でもずい分勉強にもなりました。

私は昭和2年に女子大学を卒業いたしますと、ちょうどその年に、新渡戸稲造先生を校長として新しくはじめられました女子の、現在でいえば短大形式の学校に英語の教師として勤務いたしました。その学校へ心理学の講師として松本亦太郎先生がおいでになっており、大へん私を可愛がってくださいました。その松本先生のおすすめで、私は2年間で英語の教師はやめ、児童心理学を専攻することになりました。松本亦太郎先生は日本の心理学の基礎を築いた立派な先生でございました。

母校である日本女子大学に児童研究所が創立され、松本先生が所長におなりになったときに、その助手に採用されましたのがはじまりで、今日まで児童の問題、ことに身心の発達と、しつけの問題を中心に研究し勉強してまいりました。結婚しましても、この仕事をずっと続けてきたわけでございます。

しつけの重要性は常識になったけれども‥‥

波多野　しつけは子どもの発達のそれぞれの段階において必要なものをしていかなくてはいけない。人格形成には幼児期を重要視しなくてはいけない。この二つのことを私は、くりかえし、くりかえし提唱してまいりましたが、なにぶんにも何十年もの昔のことでございましたので、当時は私の考えに賛成してくださるのはほんの一部の方だけでございました。

これらのことが、もはや常識のようになっている今日から考えますと、全く嘘のようでございます。「幼児の発達と家庭教育」これは私の学位論文で、その骨子はやはり幼児期の重要性と発達に応じたしつけを中心に、昭和10年以来の調査と研究をまとめたものでございましたが、終戦後のすでに新しい教育がはじまっていた昭和26年でさえ、なおこれが教授会を通りますまでには、大分議論が出たようでございます。

しかし、人生の大部分をこの問題にかけてまいりました私にとりましては、今日のように、それが常識にまでなってきたことは、何ともうれしく

ありがたいことでございます。

児童心理学を一生の仕事とするために、私は当時やっと女子との共学を認めるようになった東京文理科大学の心理学科に入学しましたが、それは研究所の仕事の合間に通う、いわば苦学生でありました。家庭があり長男も生まれていましたので、その中で、研究所の仕事を一人前にやり、その上の大学通学はかなりの努力でございましたが、今日になってみますと、一生の間で最もたのしい3年間でもあったように思います。

児童研究所の仕事といたしましては、調査と研究が主で、そのほかには教育相談がありました。当時は、まだ知能の問題が主であったように思います。そして心理学者といえば、千里眼の人と同じように気味わるく思われるほどの時代でもあったのです。

しかし昭和10年前後のこの時代に、おかあさんに連れられてきたお子さんが、今日ではもう親となり、またそのお子さんを連れていらっしゃることが近頃よくあります。つまり二代にわたっての相談相手というわけですね。

一度相談にいらっしゃると、あと何かのときにすぐまた出かけていらっしゃることが多く、そのため、相談を通じて親子のような親類のような長いおつきあいをしている方たちがたくさんございます。

そのほかの私の仕事といたしましては、大学に教えにいくということもしておりますので、ここでは、教授対学生という関係ですが、とにかく若い人たちとつきあいができます。そして青年や結婚前のお嬢さん方から恋愛や結婚の相談をうけ、また親に対する子ども側の意見などもよくきかされております。

幼稚園長としての経験——母子共同学習とグループの重要性

波多野　数年前、私はやむを得ない事情から、幼稚園の園長をしたことがあります。これは私には大へんな勉強になりました。それ以前に、

《波多野　勤子氏》

私は母親向け家庭向けに、程度は下げないでわかりやすい本というのをモットーとして、児童心理学や家庭教育について、ずい分努力してかいてきたつもりでございました。

それらの本は、毎年かなりの部数読まれておりますし、読者からの手紙も絶えませんので、私は幼稚園長をやるまでは、それでいいものだと思っておりました。

ところが実際にあたってみますと、おかあさま方は、私が予想しているよりも、もっとずっと育児の知識をもっています。ただ、あれこれとあまり知っているために、かえってそれが知識としてだけにとどまり、自分のものになっていないことがわかりました。

そこで私は、幼稚園を親と子が共に学ぶ幼稚園というふうに体制をかえまして、おかあさん方に幼稚園の中に班をつくらせ、いわゆるクラブ活動の形で幼稚園に参加させ、本をよむばかりでなく、実際に園の活動の一部の責任をもつという形で実際指導をし、その間に個々の親と子のやりとりを見ながら、しつけの態度、子どもの指導の効果的なやり方等についておかあさんを指導してみました。

これは、大へん効果があがりました。おかあさん自身もよろこびましたが、母親に正しい育児の理解と態度ができると、子どもは急速に伸びていきます。また、家庭での態度にもよい変化がおこるらしく、幼稚園のクラブ活動だというと、ご主人がすすんで留守番をしてくださるというほどにもなりました。

幼稚園で学んだもう一つのことは、幼稚園で子どもが学ぶものは社会性とか独立性とかいったもの以外に、グループとしての意識がどんなに強く作用するか、そしてこれを活用することが教育をしていく場合に、どんなに大切かということでありました。

実践的指導のための母親乃学園

波多野　このような具合に、幼稚園での経験で、どうしても実践の指導をしなくては、母親に教育の正しい態度は身につけさせられないとわかりましたので、どなたかにそれをやっていただきたいと、あちこちよびかけてみましたが、これがまた、母親が育児の知識だけは十分にもっているだけにむずかしい仕事なのです。それでとうとう決心して、今日の教育大学、当時の文理科大学にいっしょに学んだ友人たちと、おかあさんの勉強会、それも、知識をふやすのではなく、もっている知識を整理して母親としての正しい育児教育の態度をつくるのを目的として、財団法人母親乃学園をつくったのでございます。教育大学教授の鈴木清さん、この間まで文部次官だった内藤誉三郎さんなどが同じ学年だったのは幸いでした。

おかあさん方の中に、母親乃学園の趣旨に賛成してくださる方が多く、この会は今年で3年目になりますが、あちこちに支部ができ、会員もおどろくほど全国的にのびてきております。みなさまに大へんよろこばれているところをみると、こういうのが現在の社会に必要であり不足している面なのでしょうね。

そのおかあさま方とお話しあいするにつけ、しつけの仕方は、根本の問題は変わらなくても、そのやり方表現の仕方は時とともに変わっていかなければいけない。ことに住居が最近のように団地形式が多くなりますと、そのことを考慮に入れながら、その中でいかにしつけていくかを、考えていかなければいけないとつくづく思うのでございます。これはコミュニティの問題としても大切なことだと思いますので、みなさまに今日はぜひ取りあげていただきたいと存じます。

報告の要約

波多野　なお、今回のテーマは「家庭のしつけ」とうかがいましたので、報告はまず一般的に、しつけはどうあるべきかを取りあげ、その次に、私が平常直接見たり

きいたりしている面を中心にして「日本の家庭のしつけの現状」をあげ、そのあとで「しつけの目的」をあげて結びといたしてあります。

この中には、さきほどちょっと述べました、住居の変化に対応するしつけと、家庭の中の人間関係としつけの関係については、あまり述べておりません。この二つについては、今日ご出席のみなさまから、いろいろご意見やご経験をうかがえると存じましたので、このようにさせていただきました。

1. 新しい時代の家風をつくろう

波多野　さて、報告をおよみいただいていない方もおありかと思いますので、その中でとくにごいっしょに考えていただきたい問題を二、三取り出させていただいて、お話の糸口にいたしたいと思います。

第一は、近頃はその家その家の特徴がなくなりすぎてしまったのではないかということでございます。で、私は新しい時代の「家風」といいますと、古くさいのですが、それぞれの家庭の特徴をつくり出していくということを提唱したいのですがいかがでしょうか。

いいかえれば、しつけはまずよい夫婦関係を土台とします。子どものしつけについては、しつけの根本的な態度について、夫婦の間で、意見がくいちがわないようにすることが、よい家庭教育には不可欠のものでしょうね。この点さえはっきりしていれば、母親が仕事をもとうともつまいと、それぞれの環境に応じて、よい教育ができると思います。

しつけというのは、もともとそれぞれのうちの特徴があっていいと私は考えるんですけれども、これが戦後たいへん少なくなったと思います。昔ですと、下町の人はこうするけれども、われわれ山の手の者は違うとか、この態度には幾分問題はありますが、とにかく他人がすることを全部まねするということはございませんでした。

たとえば、七五三の祝いできれいに着飾っているのをみても、あれは下

町の風習だからということで、山の手の子どもたちは別にうらやましがりもしませんでした。

ただ昔は、家とか身分とかが中心でございましたから、その点は感心できませんけれども、やはりそれぞれの家に、特徴はあっていいのではないでしょうか。今日の家庭は、夫婦が単位となっております。

しかしお互い気にいって結婚しても、夫も妻もそれぞれ違う環境で20年以上も育ってきておりますから、考え方や物の見方に違うところがかなりあると思います。けれどもいっしょにくらし、お互いに話しあい、歩みよっていくうちに、これだけは生活の柱として大事にしようというものがでてくるでしょう。

たとえば、社会的に認められることは少なくても、われわれは、「誠実に暮らしていこう」とか、あるいは宗教をもっている方なら、「宗教を中心にして自分たちの家庭を築こう」とか、いろいろふたりで共通する柱というものができるでしょう。それがすなわち新しい時代の家風だと思います。

ほんとうのしつけというのは、こういう両親の信念にもとづいた態度が、はっきりしたときにできるのだともいえましょう。この態度さえできれば、親が学問したとかしないとかいうことは問題になりません。子どもに対するしつけの方針もきちんと決まって、その線にそって、必要の場合は、きびしさも与えられるんじゃないかと思います。

2. きびしくすることはむずかしい

波多野　きびしさを、ここでとくにとりあげましたのは、私が母親として経験いたしましたうちで、いちばんむずかしかったのは、子どもにきびしくするということだったからでございます。自分が腹をたててきびしくすることなら、なんでもないんですけれども、そうでなくて、子どものことを中心に考え、将来のことをおもって、子どもにきびしくすることは、たいへんむずかしい

のです。

これは、ご同席の犬塚さんも、おかあさんのひとりとして、おそらくご経験だと思うんですが、甘くすると、子どももいい顔をします。こちらもたいへんいい気分になります。でも、それでは子どもの根性は育ちません。この、必要なときにはきびしくするということが、いまの社会では、非常にたりないんじゃないだろうかと思います。

この傾向は、一つは親が自分のうけた教育と違う今日の教育を、よく知らないため、自信がないところからもきていましょうが、もう一つは、子どもを大切にしすぎるところからも、きていると思います。そしてこの傾向は、団地に住む方に、ことに強いように見受けられます。

3. 団地生活の問題点

波多野　これはどうしてだろうか、と思って、いろいろ調べたんでございますけれども団地にいる方というのは、たいてい両親のところから出て、自分たちだけで住まっている方たちで、すべての望みを、お子さんにかけていらっしゃるというわけですね。

子どもは、自分たちの夢を実現してくれる宝物なのですから、どうしても、大事にするということになっているのでしょうね。また、きびしくしないのは、隣近所への気がねでもあるらしいのです。

団地は年々急速にふえています。ですから、団地がうまくいくというのは、コミュニティとしても非常に大事なことだと思うんですけれども、目下のところこんな具合で、団地のお子さんの性格づくり、つまり、しつけは、普通のうちよりは、うまくいってないんじゃないかと思います。

調査によりますと、団地のお子さんの知能は、一般のお子さんよりもずっと高いようでございます。けれども、ものの責任をもつというようなしつけはできていないんですね。団地というところは、人にしろ物にしろ、必要なときには、その必要経費を住人の戸数で頭割りにして、何円ずつというふうに出すのですってね。ですから、お金をほんの一部分出すだけで

掃除する人がやとえたり、砂場の道具がそろったりします。だから何に対しても責任をはっきりもつということが少ないのだと、これは、団地に住んでいるおかあさん方のお話でした。

品物に共有物が多いというのも、ものを大切にしない原因になっているのではないかとのことでした。共有物は、自分の私有物よりも大切に扱うのがほんとうでしょうが、日本人の間には、まだその意識が育っていません。したがって、現在の団地のような生活では、責任をもつということを育てる機会があまりないんですね。だから子どもたちは、物を大切にすることをしないし、こわれたとき、自分で工夫して直そうなどという態度も少ないというのが、多く見られる共通点だそうです。

それから、実際にものを作ったり育てたりすることができないのも、団地の子の特徴で、団地では、犬やネコを飼ったらいけない、というところが非常に多いし、また工作なんかで、トントンたたいたりすると、あっちこっちから苦情がでる、というようなことが多いそうでございます。

4. 成績中心で「しつけ」がおろそかになっている

波多野　こういう具合なので、では今日の若い母親たちが、何を目標にして子どもを育てているか、と申しますと、なるべくいい学校へ入れる、それが最終の目的のようになっております。

いい学校へはいるためには、人を押しのけてもなんでもいいからやりなさいという態度、それから、いい学校へはいるための勉強をするなら、しつけなんかあとまわしでいい。たとえば、女の子であれ男の子であれ、食事のあと「ごちそうさま」といって食器を台所まで持っていくぐらいは、1分とかからないことですが、それすら母親はさせない。そのひまがあったら勉強してもらった方がいい、といった具合です。テレビにしても、あれは使いようではかなり子どもには役に立つものなんでございますけれども、入学までは一切禁止、カバーをして勉強専一にさせているといううち

がでてきたりしているようでございます。

とにかく、いい学校へはいる、いいコースに乗る、それがいい就職までにつながろう。それ以外、考えていない人が多くなったのは困ったことでございますね。

5. 他人志向型の人間がふえている

波多野　これは一般の傾向で、団地だけに限ったことではありませんが、ことに団地ではげしく感じられるのは、団地は家賃も主人の収入もおよそ似たりよったりなので、それがわかっているだけに競争意識が強くなり、それが子どもに多くかかっていくのですね。他人さまがどうだろうか、ということが非常に気になり、隣がなにかしたら、自分のほうはやりくり算段しても同じことをしないと気がすまない。負けたくないんですね。幼稚園などでも、ひとりがなにか珍しいものを持ってきますと、1週間位の間に、ほとんどの子が持ってくるようになります。同様に、子どもたちの学校の成績についても、母親は負けん気を発揮しますので、子どもたちの能力が同じぐらいだといいのですが、たまたま、学校のできない子どもがありますと、大へんです。親は自分の努力で、何とか成績をあげようと、無理な要求を出して、子どもにせまります。

そういう圧力がかかりますと、子どもの中には、やりきれなくなって、かえって不良化のほうへいくことも少なくありません。

この辺でみんなで反省し、大切なのは学歴よりも心のしつけであり、子どもの幸福な人生もそこから生まれることを、みんなで考えるようになりたいと思います。何とかして、家庭を中心とし、隣近所がもう少し競争的でなく協力的な住みよい社会をつくっていきたいものです。

住む人がその気になれば、団地は最もこれが実行しやすい場でしょう。しかし、そこに住んでいると、井の中の蛙となって、おかしいところも、いいところもわかりません。ですから、つとめて、他所の会合に出たりし

て、自分たちの生活を、第三者として眺める機会をもつようにしたらいいと思います。

そうすると、はじめて自分たちのやっていることが、いいか悪いか、判断できるようになるでしょう。

ちょうど、私たちが外国へいってみると、日本のよさも悪さもわかるようなものですね。団地に住む方たちがだんだん多くなりますから、コミュニティの問題としても、そんなことを中心に、みなさまとお話し合いができたら、とてもいいと思うのでございます。

Ⅱ　コミュニティ・家庭生活・心のふれ合い

コミュニティは家庭からはじまる

矢野　ありがとうございました。いまのお話のように、日本にはコミュニティの問題はまだ非常に未開発な分野が多くて、それをなんとか、だんだんみんなでいいコミュニティをつくる方向へもっていきたいというのが、この研究所のねらいなんですけれども、そのなかにある大きな問題として、将来のコミュニティの担い手になる子どもを、どういうふうに育てていくか。まあ「しつけ」ということは、将来に対する教育ということになるだろうと思いますが、それがきょうのテーマでございます。

だから問題は、みんなその根元はコミュニティにつながっているわけなんですが、そのなかで、だんだんお話を進めていただくとして、まず第一に、家庭におけるしつけの問題、これが非常に大きな部分を占めるわけです。

そこにはいります前に、ちょっとお聞き頂きたいのは、私自身がどういわゆる世の中、人類の社会というものの単位はなんであるかということを、ときどき考えるんです。

このごろ結婚式なんかにいくと、そういうあいさつをしじゅうするんですが、人間の社会というのは、個人が単位だともいえますけれども、そのなかに、男と女と２種類があるということも考えなきゃならない。

しかし、実際の人間社会、いわゆる世の中の単位となると、男、女という個人が単位の場合もありますけれども、大部分は、それが結ばれて家庭

というものをつくっていく。そうすると、そこに一つの家庭という単位ができます。どうも世の中の動きの単位というものは、私はこの家庭じゃないか、という気がするんです。人間関係にしても、生活にしても…。だから、家庭というものはコミュニティの非常に重要な単位である。むしろこれが最初の単位である。極端にいうならば、まだ若い男女の方は、そこへいくまでの過渡的の教育を受けているのであって、ゴールインして、始めてそこで家庭をもつ。そのなかに、また子どもが生まれる。それを次の家庭の形成者とするまでは、やっぱり親の責任において家庭で育てていく。したがって、家庭というものがコミュニティの単位だ、と私は考えているわけであります。

社会へ向ってのしつけ

矢野　さような意味で、しつけの問題としても、家庭における子どものしつけというものを、いちばん先にとり上げなきゃいけないんじゃないか。どういうふうにしつけるかというと、そのしつけは、ひとりの人間個人としての完成、個人としてりっぱな人間にすることと共に、それと不可分のこととして、社会人としてのりっぱなものをつくっていかねばならない。すなわち、ひとりの個人と社会人というものは、不可分のものだと思います。

だからしつけの内容としては、最後にきっとそういう問題もまとめていただけると思うんですけれども、その子どもを、肉体的にも精神的にも、りっぱな人間にしていくこと、これを自己錬成といいますか、鍛錬というか、そこに、個人を育てていくということとあわせて、社会人としてりっぱな協力もでき、社会奉仕の精神も十分にもち、コミュニティの一員として、りっぱに責任を果たしていけるように育てるということが、しつけの目的だと思うんです。

それで、いまお話のあったなかには、その点で、まだ日本においては、親の考え方にたりないところがあって、どうも、自分の子どもであるとい

う、自己本位的な愛情におぼれたところがあるし、ほかの人に負けないという——これもある場合には大事であるけれども——そういうような意識からでたことは、ややもすると、社会に対して非常に迷惑をかけることになる。いわゆる、いいコミュニティをつくるということからは、全然離れた考え方になるというようなことになります。やはり結局は、これからの日本人の子どもは、こういうふうに、しつけなければいけないという、あるわくができることは、当然必要になってくると思うんです。

そこで、いちばん関係の深いと思われる家庭の問題、家庭におけるしつけ、家庭としつけの関係、このほかに、幼稚園その他の学校、あるいはボーイスカウト、青年団、一般社会、隣近所とか、外部の影響もございましょうが、それらについてはだんだんにお話いただくとして、まず、いちばん重要性が高いと思われる家庭としつけの問題を、ひとつとり上げていただきたいと思うのです。

さて、家庭というもののなかで、子どもをめぐる人間関係を考えると、おとうさん、おかあさん、その他おじいさん、おばあさん、きょうだいとの関係などがありましょうが、なんといっても、母親と子どもの関係というものが、分量的にも圧倒的に多いし、また重要性からいっても、いちばん大きな問題である。

それから父親でしょう。そしてまたおじいさん、おばあさんのある家庭には、また特殊な問題があるということだと存じますが、まずいちばん関係が深い母親と子どものしつけというものの関連性についてひとつ、男性の方から口火を切っていただいたらどうかと思います。滑川先生、母親としつけという問題で、ご感想なりなんなりと、お聞かせ願いたいんですが。

「鍵っ子」はふえている

滑川　去年、厚生省が発表した資料*によりますと、日本の母親のなかで55％のおかあさんは、家事以外の労働に従事している。そのなかには22％という農村の婦人もはいっていますけれども、それ

が年々増加する傾向にあると報告されています。

＊　なお、昭和39年２月発表された厚生省児童局「全国家庭児童調査結果報告書」の抜すいを巻末にかかげておきますから、ご参照ください。

《滑川　道夫氏》

ですから、波多野先生がおっしゃったように、職業と家庭の問題にそれがからんで、戦後の婦人の社会的な進出というような問題も、もちろん背景にあるわけですけれども、そうなってきますと、これまでおかあさんが家庭教育の中心できたのが、家庭の構造がかなり変貌をとげてきている、こういう現実をやっぱり第一に考えなきゃいけないんですね。

矢野　だんだんひどくなってきますね。

滑川　それとカギッ子は団地ばかりでなく、多くの家庭に存在するということです。昨年の11月に私、岡山県の津山にまいりましたら、そこの小学校の68％のおかあさんが働きに出ておる。そうしますと、子どもが学校から帰ってもおかあさんがいない。そういう子どもは、放置しておくとあまりいいことをしない。学校としても考えなきゃいけないというんで、勉強クラブというのをつくっているんです。うちにいるおかあさんの家に、近所の子どもたちが集まって、そのおかあさんが面倒をみる。おかあさんが夕方帰ってきたころ、子どもも家に帰るというんです。つまり学童保育所の形態です。そういう状況が全国的に深まってきていると、みなければならないようです。

そういうふうになりますと、波多野先生がいま団地っ子に例をとられたような欠陥も、現実にでておりますし、また一面、プラスになっていると思われる点も、あるんじゃないかと思うんです。

波多野　そうでございますね。独立心がでるなどはよいでしょうね。

保育所の使命

滑川　おかあさんにベタかわいがりにかわいがられるといった、過剰保護に陥らないで、子どもがおかあさんのいない間、自主的にやるというようなことですね。ごはんを炊いたりすることでも、子ども自身がやる、すすんで勉強もする。そういうプラスの面も、それにからまってくるんじゃないかと思うんです。

矢野　さっきお話のあった、団地などで隣ともつきあわないというようなことは、その団地にコミュニティがないということなんですね。そこはおかあさんたちが協力して、母親の半分が留守だとかなんとかいう欠点を補って、なんとかやっていこうという相談さえすれば、あるいは、手のあいているおかあさんが当番で何人か預かる、というような工夫も生まれるかと思うんですけれども、いまそこまではいっていない。

滑川　現に千葉県のある団地のように、保育所をおかあさんたちが協力してつくって、当番で指導にあたっているというところもあらわれてきておりますね。おそらく、だんだん多くなるんじゃないかと思うんです。

また社会的に、そういうりっぱなしっかりした指導者のいる保育園とか乳児院、学童保育所というような施設が貧困だから、おかあさんが非常に困っているんじゃないかと思います。

もしそういうものができてくると、安心してそこへやれるし、家庭においてベタかわいがりする場合よりも、ある点では、もっといいしっかりしたしつけ方ができるでしょう。

矢野　しつけ方だって、みんなの知恵で、だんだん、いいものができてきますね。

滑川　そういう傾向ができていると思うんです。

不可欠な肌のふれ合い

矢野　そういうものは、これから奨励というか、研究されなきゃならない課題の一つでしょうね。

しかし一面において、外国の例でも、それじゃ非常に完備した保育所なり、なんなりに預けるということになってしまうと、形のうえにおいては、十分なしつけがついて来るはずだけれども、他面、母親と接してないという点で、人間的にはやっぱりどうしても完全でない。生理的にもそういえるのではないか‥‥これは、時実先生にうかがわなきゃならない問題ですが‥‥。

滑川　母親が接するという点で、これは僕の考え方がまちがっているかもしれませんが、子どもは、少なくとも2歳ぐらいまでは、母親が感覚的にかわいがったほうがいいと思うんです。

矢野　どうも、私もそうじゃないかと思いますね。

滑川　それ以後は、独立させるようないい保育園でもあれば、それへ入れるということも働く母親にとっていいと思いますけれども、肉体的にかわいがるというんですが、そういうものをもった子どもと、そうじゃない子どもと、なにか大きくなってから、かなり違った結果がでてくるんじゃないかと思います。

矢野　これは時実先生、どうなんでしょう。理屈の問題でなしに、そういうことは必要なんじゃないですか。そうだとすれば、忙しいおかあさんでも、その時代は、そういうことに努力しなきゃならんということになりますが‥‥。

時実　私たちがものをいう場合には、はっきりした実験的な根拠が必要なんで、そういう根拠があれば、みなさんに文句なしに認めていただけるわけです。

したがって、このような科学的根拠があれば、いろいろ議論しても、建設的な議論になると思うんです。

孤立したネズミはノイローゼになる——5秒間の接触——

時実　さきほど滑川先生から、なにか肉体的にかわいがるというお話がございましたが、最近こういう実験があ

ります。

ネズミを使った実験ですが、ネズミを群れにして飼っている場合は、なにも変わったことはありません。ところが、その群れから1匹とり出しまして、孤独の状態で飼うようにします。コミュニティがぜんぜんない状態ですね。そういうアイソレーション・テスト（孤立テスト）というのをやってみます。そうしますと、日がたつにつれて、ネズミが非常に神経質になってきます。はじめはおとなしいネズミが、数週間もたちますと、手がつけられなくなるんですね。精神的な変化ばかりでなく、肉体的にも、たとえば皮膚に炎症ができたり、内分泌器官が肥大したり、あるものは小さくなったり、そういうような変化がでてきます。

そういうネズミをもとの群れに返してやりますと、また普通におとなしく元気になる。ところが、そういうアイソレーション・テストの途中で、毎日ものの5秒間、ほかのネズミと、皮膚と皮膚を触れ合わせる、つまりスキンシップというものを与えてやりますと、さきほど申しましたような精神的、あるいは肉体的な病的な現象が、ずっと遅れてくるんですね。5秒間触れあうだけで違ってくるのです。

ということは、ネズミのコミュニケーションは、言葉というものがないですから、そういう皮膚の接触が必要なわけです。ですからさきほどおっしゃいましたように、2歳以上になりますと、まがりなりにも、言葉で、あるいは表情や動作でコミュニケーションをすることができますが、それ以下の子どもですと、おかあさんがおっぱいを与えると同じように、まわりから、皮膚の接触というものを、与えてやらなくちゃならない、ということになるわけです。

それからサルでも、同じようなことが実験されております。孤独にしますと、完全にノイローゼになってしまうのです。

コミュニケーションの高度化

時実　ですから、私たちのコミュニケーションの、いちばん基本的なもの

は、皮膚と皮膚との接触でして、私たちが言葉を獲得すれば、言葉というもので、より高度なコミュニケーションができるということが考えられます。

とくに赤ん坊には言葉がない。しかも赤ん坊はおっぱいを求めると同じように、母親あるいは父親の肌を求める。それを与えることが、家庭での母親や父親の務めであると思うんです。

《時実　利彦氏》

ですから、ただおっぱいを与えるだけが母親の務めではありません。それだけでは、いちおう肉体的な欲求は充たされますけれども、肌を求めるという精神的な欲求は充たされていないと思います。

本能的な欲求は、三つ考えられていまして、一つは食欲——自分のからだを健康にするためのもの、それから性欲——種族保存のためのもの、そして最後に、もっと基本的なもので、集団をつくるという欲求ですね。理事長さんがコミュニティということを問題にしていらっしゃるのも、そういう集団という欲求がなければ、こういうものは問題にならないはずです。

私たちが人間関係とか、人間疎外ということを口にするのは、おたがいにいっしょになりたいという欲求があるからですね。どういう姿でそれをするか、あるいは、なにがそれを妨げているかということが、問題になるんだと思うんです。

努力と協力がなくなると人間は退歩する

矢野　私は、乱暴なしろうと考えなんですけれども、人間というものの、本質を絞っていくと、人間というものは、生きものであるということからは当然のことかも知れないけれど、あらゆる才能の種は、生まれたときからもっている、これをうまく引き出して、その才能を錬成してゆけば、どこまで伸びるかわからんものをみんなもっている、それを引き出すことが教育であると思っているんです。

だから、本人に努力ということを教えなければいけません。私は剣道を

やったから、これを鍛錬といいますが、とにかく人間とは鍛えるべきものであると信じています。死ぬまで自分を鍛錬しつづけなければならない。そういう努力をやめたら、その瞬間に退歩する。肉体的にも、精神的にも……。だから鍛錬しなきゃならんということは、人間の宿命なのだと思っています。

それからもうひとつは、協力しなきゃならんということです。人間は、他人といっしょに住んでいかなけりゃ生きられないものだ。それも努力の一部分といえるけれども、とにかく努力と協力ということ、これが終生2本の柱だということを、小学校の生徒なんかによく話してるんです。いまの時実先生のお話のように、やっぱり人間というものは、ひとりでは生きていかれないものなんじゃないですか。

時実　おっしゃいました協力というのは、むしろ本能的にお互いもっているものだと思うんです。それをあえて、いわゆる「個」というものをあまりにも妙な方向に発達させて、その協力の本能的な姿をなくしてしまっている……。

矢野　いまは、少しそれのゆきすぎじゃないんですかね。

時実　たとえば、ものを食べるというのは本能ですが、それをあまり工夫しすぎて、かえって栄養にならないものばかり、みんな食べている……(笑声)、というようなことにもなりかねない。

それから努力のほうは、身につけた人間の能力ですから、生まれてから習得して身につけるわけです。

マネジャー病——胃潰瘍型と脳溢血型

矢野　アメリカあたりで、マネジャー病といいまして、40歳ぐらいのマネジャー・クラスになると、急に病気が多くなるんですね。胃潰瘍になるか、高血圧か、脳溢血になるか、どっちかになる人が多い。

どういうわけだと聞いてみたら、これは人間の本能との関連からきてい

るんで、欲求が充たされないとこうなってくる。人間には、いくつになっても母親に抱かれたいとか、ほかの人から助けてもらいたいとか、暖かいもののなかに、自分がはいりたいとかいうように、頼りたいという本能がある。

ところがマネジャーになると、だれにも相談できない。自分ひとりで処理しなきゃならんというときに、気の弱い人たちはみんな胃潰瘍になる。事実、急に胃潰瘍がふえるんですよ。

それから気の強い方の人たちは、おれは負けないぞ。さっきの話のように、うちの子は負けない。なんでもいい学校へ入れてやって、だれにも負けるものか、というような母親がいるのと同じわけで、マネジャーのなかには、人をかき分けて出世したい、あすこの会社なんかに負けるものか、というような強い気象で他人を征服したい欲求をもっている人もいるんだけれども、それが思う通りうまくいかないと、これまた欲求不満となって、みんな脳溢血をやったりする‥‥(笑声)、ということを聞いたことがあるんです。しかしまあ、原則的にいって人間というものは、たったひとりじゃ生きていかれない本質があるんだと思うのです。

母子接触の平均時間は5時間

波多野　さっき時実先生が、ネズミの実験で5秒でのお互いの接触が効果的だとおっしゃいましたね。私、そこのところに大事なカギがあるんじゃないかと思うんです。つまり、人間の場合、親と子がいっしょにいるっていうことは、大事なことだけれども、朝から晩までべったりくっついていなくてもいいんですね。人間の場合、どの程度子どもといっしょにいるのが理想的か‥‥。

矢野　これをじょうずに使っていくということですね。

時実　こういう統計がございます。東京で調べたものですが、職業をもっていらっしゃらないおかあさん方が、1歳未満の赤ちゃんに昼間1日のうち接する時間、たとえばおっぱいを飲ますとか、おんぶするとか、だっ

こするとかいった時間を合計しますと、平均5時間ぐらいですね。

それで、ある女性のアナウンサーの方がそれを聞きまして、ちょうど1歳未満の赤ちゃんがいるので、心配して調べたのです。その次に会いましたら「安心しました、私もやっぱり5時間は接している」‥‥。勤めに出る前と、勤めから帰ってから、接しばなしにしているというのです。健康な心がけをもっていらっしゃるおかあさんなら、それだけ接しないと気がすまない。また赤ちゃんのほうも、やはりそれだけの接触を求めているんじゃないかと思われます。

矢野　そういう知識を母親がもつということが、非常に大事なことですね。

青井　波多野先生、どうなんでしょう。

スキンシップの不足と過剰　いまの逆に、日本では、あんまりスキンシップ（皮膚関係）の度がすぎて、母と子どもがべったりとひっつきすぎて困る（笑声）というような主張も、あると思うのですけれども‥‥。

波多野　それでいま、時間のことをうかがったんです。

私はね、いまは、とてもそんな元気はないんですけれども、若いころには、夜、勉強会へいきましたんです。勉強会にいこうとすると、子どもにはふしぎにわかるのです。

今夜はおかあさんは出かけるなと思うと、床へ入れてやっても、いつまでも寝ないんでございます。いつもなら5分くらいで寝るのに寝ない。そのときに、いっしょにそばに寝てやりましても、もういいかなと思って退くと、すぐ目をさましてしまうんです。そして私を離しません。こんな具合で毎度遅刻をしますので、どうしたらいいかって考えまして、あるとき私、こっちからしっかり抱きつくようにしてやったんです。

満足するほど、ギュッと‥‥子どもを抱いてやるというより、こちらが子どもにあまえるみたいに、そばにからだをすりつけるようにしていっし

ょに寝たんです。そうしましたら30分ぐらいして、「おかあさん、もういいからむこうへいってくれ」(笑声)‥‥。そこで「でかけますよ」っていいましたら「いってらっしゃい」と元気にいってくれました。生活の知恵ですね。子どもにもやっぱりある限界があるんですね。

でも、その限界は子どもによって違うでしょう。だから親子がいっしょにいる必要時間の平均は5時間だとしても、それなら誰でも5時間でいいかというと、そうは決められないんで、たとえば私のやったように、しっかり抱いて飽和状態にさせるのでも、ある子どもは1時間ぐらいじっとしていなくちゃ満足しないでしょうし、ある子どもは15分でも、もうたくさんになるかもしれない。

ですから、その子の様子をみながら、その欲求をある程度充たしていくというのが、いちばんいいことになるかもしれませんね。

矢野　子どもによっても違うし、そのときそのときによっても違うでしょう。子どもの状態にもよるでしょうからね。それをおかあさんは、見分けなきゃいかんと思うんです。

時実　最近は、集団欲という本能的な欲求が非常に問題にされていまして、たとえばわれわれが日常体験することで、動物をたたいてやったり、なでたりすると、非常におとなしくなるんです。

なぜかというと、これは動物の集団欲を充たしている。ちょうど動物にエサをやると同じことです。あるいは、エサ以上の効果があるんです。人間と動物が、なでるということ、さわるということで相通じる。いかにコミュニケーションがたいせつかということがわかります。

たとえばイルカを訓練する場合なんかでも、アメリカでやっておりますが、女の子がいっしょに水槽にはいって、イルカと抱き合ったりしているんですね。

Ⅲ 「しつけ」における父親の役割り

父親のあり方

矢野　結局、これからは世の中の移り変わりもあるし、母親のあり方というものは、頭を使って賢くやっていかなきゃならんということがわかりましたし、一方にまた、いままで溺愛しすぎているという問題もあると思いますし、いままでのとおりでいいとはけっしていえませんね。いまの日本の母親のあり方は、もっと母親が啓蒙されてしかるべきだし、それからまた、母親同士が協力して、子どもを育てることを研究するという問題があることをうかがったんですが、このへんで、こんどはおとうさんにうつりましょう。

父親のあり方とか、いまの日本の父親は、どんな状態なのかということについて、これは女性の方にうかがったほうがいいんで、ひとつ犬塚さんにうかがいたいんです。

その前に、私から申しあげますが、犬塚さんは、ご主人が田園調布の温室村というところで、ずっと温室園芸をやっていらっしゃいます。ですから、ご主人は1日うちにおられるんです。その点で、一般の家庭とは違った環境におられる。

しかし、学校でＰＴＡの世話をされたり、なにかしておられますから、非常に知識はお広いと思いますし、田園調布あたりのいろいろのケースもよくご承知だと思うんです。

ひとつ、父親というものについて、ご体験でもいいし、ご感想でもいいですから、なにか口火を切っていただきたいと思います。

子どもが大きくなるにつれて父親のあり方が重要となる

犬塚　私、自分のうちのことでございますけれども、私のうちは、主人が1日うちにおりますものですから、子どもがかえって父親にあまえるということがございません。

父親の態度も、どちらかというと、無関心なほうでございますので、子どもにこまかいことはなにも申しませんし、全部、私に任せているというふうなところがありますが、私、いままではそれでいいと思っていたんです。子どものことは全部私がしていれば、子どもは父親が毎日働いている姿を、サラリーマンと違いまして、朝から晩まで見ていることができるわけでございますから、その感化は大きいというふうに考えておりましたんですけれども、年ごろになってまいりまして、私ではとてもまにあわない、なにか欠けているものがあるような気がしてまいりました。悩みだとか、いろいろの相談ごとでも、母親より父親と話し合いたい問題が、これからは多くなると思うんですが、なんか遠慮があるというんでしょうか、スムースに話し合いができないんですね。何でも私を通してということになってしまいます。それで、これはしまった、もっと小さい時から父親と子どもの接触が必要だったと反省しましたが、もうまにあいません。父親はそれぞれ忙しい仕事を持っているんですが、1週に1度でもいいから、子どもに接する機会を作って、小さい時から話し合うことが大事だと思います。

PTAの会合で、おもに、お若いお父様ですが、そんな点で理想的なご家庭のことをうかがいますが、そういうお子さんはしあわせだと思います。

父親のありかたについては、各々の家によって、いろいろと条件が違ってくると思いますが、先生方に教えていただきたいと思います。

矢野　犬塚さんは、男のお子さんばかりしかおもちでないんですが、かりにほかの家庭でも、男のお子さんと女のお子さんをおもちの場合に、父親というものの役割りが違ったほうがいいでしょうか。あるいは、違わざ

るをえないという場面が‥‥。

波多野　どうですか、滑川さん。滑川さんのところは両方ですから…。

滑川　両方ですけれども、私はあんまりいい父親じゃないんです（笑声）。しかし、いま犬塚さんがおっしゃったこと、父親が子どもの教育に、いちいち、こまかく指図しないほうがいいんじゃないか、という気がするんですがね。

矢野　私もそう感じますね。1日おられるということだけでも、ほかにないことですから、かえって黙っておられても‥‥。

滑川　大局をみて大事なところだけを見守る‥‥。日曜日なんか、小さい子と遊んだりすることは、大事だと思うんですけれども。

両親の話し合いを中心にして

波多野　子どものしつけは、大きいところは両親が相談して決めているのだということを子どもたちが知ることは大事じゃないでしょうか。

犬塚さんのところは、おとうさまはおとうさまで働いていらして、おかあさまがその収入を受けとって、子どもをしつけていらっしゃるとか、育てていらっしゃる、というふうにお子さんが感じとっていらしたのじゃないか、という気がいたしますけれども、いかがでしょう。

犬塚　子どもは、ほとんどの場合、私に話を持って来ますので、これは父親に話して相談したほうがいいというようなことを話して、進学、就職の問題だとか大事なことは、家族全体で話しあうようにしております。そして、最後に決断は父親ということになります。

波多野　そうでございますか。それじゃ割合にいいわけでございますけどね。

矢野　それから、おとうさんといっしょに仕事をするというようなことは、ぼっちゃんたち、なさいましたか。

犬塚　はあ、少し大きくなりましてから、それもどっちかっていいます

《犬塚　幸枝さん》

と、アルバイトというような形で‥‥(笑声)。そういうふうにもっていきませんと、子どもがあまり動かないものですから、

「日曜日はひとつ、やってくれないか。アルバイトでどうだ」

なんていいますと、

「よしきた」(笑声)

といって出ていくんです。自分のほうから、「おとうさん、忙しそうだから、なにか仕事しましょう」というふうに、私は出ていって欲しいんですけれども、そういうところは、ぜんぜんないんですね。

矢野　いまのお子さんはそうでしょうね。われわれの時代には、いまのお話のようなのは、かなりあったと思いますけれども‥‥。まあしかし、それでもお父さんの仕事がどういうものであるということは、体験されているわけですからね。いっしょに働くということは、非常に大事なことでしょうね。

父親にとっての家庭の意味
――憩いの場と教育の場

波多野　父親のあり方として、男性の方にうかがいたいのですが、家庭の憩いとしつけということが、近頃だいぶ問題になっているのでございますけれども、家庭における自分の憩いと、家庭における父親としての子どものしつけ、それをどういうふうに考えていらっしゃるでしょうか。

滑川　父親が外で働いて、うちへ帰って憩う。そのとき、子どもの教育にマイナスになるような憩い方をするというところからくる矛盾、そういうことを問題にしていらっしゃるんでしょう？

波多野　そうなんです。私は家庭というのは、おとうさんが憩うその自然の姿のなかにも教育があると考えたいんです。そして、おとうさんとしても、家庭に帰ってくること、そのことが憩いになる。たとえばみんなと

いっしょに水まきをするなど、多少家事労働を手伝っても、それが憩いになるようであって欲しいと思いますけれども、どうも多くの男性のおっしゃる憩いは、そうではなくて、外で大いに緊張してえらい方の下で使われてくるのだから、うちへ帰ってからはそういうことはしないで、子どもに還ったようにわがままを許してもらいたいという気持が強いようですね。

したがって、その時には子どもへの影響は考えたくない。その点を取りあげて、今度の「期待される人間像」では、子どもへの影響を考えて姿勢を正すようにといったふうに書いてあったと思いますが、これだとどうも親が子どものために、自然にふるまえないような気がしましてね。

滑川　それは子どもの発達にもよりますね。幼児期なんかでは、私はマイナスになるような憩い方を、つとめて避けてきました。

しかし子どもがだんだんわかってきたとき、夏、はだかになって行儀悪い格好してテレビ見ていても、子どものほうでも、そのために、「おやじ、けしからん」というふうにはなりませんでしたがね。

波多野　小さい子の場合、子どもに禁じていることを、親がしてみせるのはよくありませんが、はだかになってということは、はだかというのは一つの例ですけれども‥‥、私はそういう人間らしさというものも、教育のうちだという気がするんです。

そういうふうに考えると、憩いと教育というものがいっしょになって、その人間らしさのなかでこそ、教育もできるとさえ思うんですけれども、そのへんについて、男性方のご意見をうかがいたいのでございます。

職業と個性によってちがう？

矢野　私なんか、その点は非常にしあわせですね。たとえば男の方では仕事によっては、非常に疲れて、うちへ帰ったらものをいうのもいやだという場合もありますし、それからまた、唯一の楽しみは、うちへ帰ってお酒を飲むことだという人もある。そういうようなときに、酒を飲む時間なんていうのは、子どもとはほとんど縁が

ない。また、うちへ帰って勉強しなきゃならんという、仕事を持って帰る人もありますしね。

私にはみんなそれがないんです。それですから、うちへ帰ったら私の憩いというものは、とにかく娘であろうと、孫であろうとやってきて、それといっしょに楽しく暮らすってことですね。歌をうたったり、ごはんでも「おじいちゃん、いっしょに食べよう」といってとっついてくるし、というふうな、普通にいう家庭のだんらんといいますか、それが両方楽しいというんですから、その点、私は非常に恵まれている。

これらの点はやっぱり、父親の条件によると思うのです。そういうふうにしたくたって、きょうはこれを書かなきゃならないというような人は、孫と遊んでなんかいられないだろうし、それからまた、お子さんたちにもよって、いろいろに変わるんじゃないですかね。

波多野　それもありますね。

矢野　結局、人間の問題だから、ただのひとりも同じものはないんで、個々のケースでどうすればいいかというのは、親と子と両方の相談というか双方の勉強で、いちばんいいものを捜しだしていくことじゃないか。

そのためには、親のほうも、子どもにはどうすればいいんだということを、ある程度、子どもにも相談しながらやっていく、というところまでいけば、いいんじゃないかという気がするんですけれども、まだ日本のおやじは、どうも、なかなかそこまでいける人が少ない。いちばん古い型になれば、家庭では亭主関白の位ですからね。うちへ帰って、外でのうっぷんをはらして、いばりたいだけいばる。またそんなにいばらなくとも、「うちのことはおかあさんだ、わしゃ知らん」と、責任を全部、おかあさんに転嫁しているタイプもあるし、それからなかには、このごろはおかあさんのほうがえらくて（笑声）、わたしがマネジャーだ、家庭のことは私に任せなさいというんで、すっかり口をふさがれてるという人も、あるんだろうと思うんです。

自分の家だけでは分からないし出来もしない「家庭のしつけ」

矢野　そのへんはやっぱり、個々のケースであって、したがってたくさんの家庭の育て方をお互いに知りあうということで、平均的なものがでてくるんじゃないか。ところが、自分の家庭一つだけでやっていると、非常な欠陥があっても、気がつかないという面もあるでしょう。だから、しつけの問題なんていうものも、これからコミュニティの大事な問題として、しじゅうみんなで勉強する。また、そういうチャンスもつくる、というふうにいかなきゃならないじゃないか。

それで、自分のところで、どうしても足りないものがあるときは、篤志な人が「それじゃ私のところへよこせ」とかいうふうに、若い人を集めて世話しておられる。そういう例もありますね。

それから、これはあまり実現はしませんでしたけれども、田園調布ができたときに、あそこは、ずっと永久に住まわれるつもりの方だけがこられて、一つのまちをつくったわけです。したがって、そこで生まれた子供たちは、そこで育って、やがていつかはそこの主人になって、また次の時代の子どもに譲っていくという運命にあったわけです。

不幸にして戦争があったために、半分ぐらいの家庭が変わられましたがさもなければみんなそうなったのです。ですから、私なども生まれたときから知っていて、いま、りっぱなおとうさんになっている人が、もうたくさんおります。

みんながみんなをしつける――「銀杏会の例」

矢野　最初のころ、それらの子どもたちが田園調布の駅へいくと、ああ、あれは慶応へいっている、あれは早稲田へいっている、あれはどこだ、あれはどこの子だかみんなお互いにわかってるんです。わかってるけれども、お互いに話もしない。これは将来のためには非常に不幸なことで、田園調布というコミュニ

ティは、いずれはこの人たちが主人になって、仲よくしてやっていかなけりゃならないんだから、いまから仲よくさせておくべきじゃないかと思って、その時分に私、そういう若い男女を集めて銀杏会（いちょうかい）という会をつくらせました。

そうすると、いろいろの年齢がありましたけれども、いままで知っているのにあいさつもできないし‥‥というような気まずいものが、すっかりとけたんですね。非常に仲よくなりまして、女学校から大学ぐらいまでの人たちが、戦争前はあすこのコミュニティを実に明るくしてくれました。いろんな仕事をみなやってくれちゃうんです。それから親同士がつきあっていなかったところも、子ども同士のつきあいから、ほぐれていくというようなことがありましてね。

またそのころに、田園調布にはいろいろな大家が大勢おられました。たとえば、法律なら松本烝治先生、地質なら脇水鉄五郎先生、鉄なら本多光太郎先生というふうに、日本の最高級の知識があるわけです。学生のなかには、そういう学問をやっている大学生もあります。その人たちが、えらい先生に個人的に接するということは、非常にいいことだから、そこで先生方に、

「日曜日でもおひまなときがあったら、お話を聞きにいきたいという学生たちに会ってやってください、ここの子どもは、みんなの共同の子どもだと思って育てようではありませんか」

ということを、提案したんです。

「それは結構だからよこしなさい」

ということで、それがあまりながくは続かず、戦争になってしまいましたが、とにかくそういうことをやった結果、みんなの子どもたち同志が、お互いに、しつけあうといいますかね、家庭からのしつけ、先輩からのしつけもありますが、そのほかに、また、みんながいっしょになっている間に、一種のしつけができたっていうことを感じました。

だからみんなで育てる。ことにコミュニティの場合には、そのコミュニティの子どもはみんなの子どもだという観念をもって、子どもの問題にとり組むことが、非常に有効だという感じがするんです。

日本は子どもの天国、だがしかしその中に社会性がない

滑川　日本人というのは、どうもそういう点がたりないようですね。昭和12年だったと思いますが、日独交換教授というのがありまして、ベルリン大学のシュプランガー教授（文化教育学者）がきたんですが、彼は座談会なんかへ出ますと、

「日本の国は子どもの天国だ」

というようなことをいったんですね。

「自分は、いろんな外国の子どもを見てきたけれども、日本の子どもが、いちばん、母親にかわいがられている」

「どういうところを、ごらんになったんですか」といったら、

「魚を買ってきても、母親はしっぽのほうを食べて、子どもにいちばんおいしいところを食べさせる」

というんです。それは一つの例ですけれども、こういうことは、西欧近代主義ではとても考えられないことで、いちばん働く人が、いちばんおいしいところを食べるべきだ、そうでないのが、日本の母親の愛情のあり方だ。最後に「しかし」といって、

「愛情に社会性がない。自分の子だけは、かわいがるけれども、みんなの子どもは、かわいがらない」

ということを批判してましたけれども、それはたしかにそうですよね。隣の子どもの悪いいたずらを注意してやると、それがきっかけになって、けんかになったり（笑声）、そういう状況で、コミュニケーションができてないですね。だから、いまのお話のようなことを、みんなで考えればいいと思うんです。

矢野　そういうことをやると、知識の低い家庭も高い家庭も、同じようなものが得られる。自分の家庭で、自分の父親から得られないものも、友達なり、よそのおじさんなりから、得てくる。そういうことは、やっぱり、必要になってくるんじゃないかということを、父親の問題としても、感じるんです。

他人からも学ぶ心掛け

ことに、これからの東京近傍の村、町なんていうことになると、おとうさんは早く出ていってしまって、夜遅く帰ってくる。そういう父親もできてくるわけですね。現に、私の知っている中にも、たとえば新聞記者の場合ですと、ほとんど息子に会えない。自分は夜遅く帰ってくる。子どもは寝ている。朝起きると、子どもはもう学校へいってしまっている。自分は10時ごろ起きる。それがずっと連続しますから、子どもに接しようと思ったって、接しられないですね。そういうものをどうするかという問題も、コミュニティとしては考えなきゃならん。

そうなると、自分の子どもだけの問題じゃない。もっとひろくコミュニティにおける他人の子どものことも考えるということが、必要になってくるんじゃないか。そこいらは、やっぱりおとうさんたちが、自分の責任の一半として、考えるべき問題じゃないかと思いますね。

波多野　それはおとうさんのほうが、むしろできるんじゃないですか。恥ずかしいけれども、おとうさんのほうがまだ‥‥。

矢野　いまの日本でしたら、おとうさんのほうがそういう話し合いも、つきましょうし、相談もできますでしょうね。

波多野　そして、よその子どもも、いっしょにしようという気持、自分の子どもだけに、焦点を合わせないという態度、そういうのは、やっぱり世の中に出ているせいか、男の人にはできてますね。

矢野　しかし、それに一つ大きな問題として僕が考えているのは、第3号に婦人の問題をとりあげたのも、日本のコミュニティというものは、と

にかく半分は女なんですからね。

しかも東京近在だったら、いまいったように、男はほとんど朝出て、夜寝に帰ってくるだけで、そこの町の昼間の人口というものをみれば、ほとんど婦人ばかりでしょう。ですから、昼間のそこのコミュニティは女の人ばっかりなのに、その女の人が相談して、うまく楽しく運営するということは、ひとつもやらない。そこの町のあり方から、なにから一切を、1年中昼間はいない男たちが決めて、それで町が動いていて、女の人はみんな自分のうちへ引っこんでいるというところに、私は非常にロスがあると思う。

だから、そこのところを考えてもらって、おとうさんたちは、平生いないんだから、これはわれわれの知恵で、われわれが、やらなきゃならないのだという自覚が、婦人の間で起こってくれば、いまのおかあさんたちが、十分おやりになれるんじゃないか。この点も、一つのヒントではないかと考えますね。

経済の問題——女性の限界

波多野　おっしゃるとおりですが、なにかしようとすると、経済問題につながりますね。

その場合に、おとうさんは、自分が出席した会の話だったら、すぐのるんです。ですから割合、問題が片づきやすい。おかあさんたちが集まって、名案を出したとしても、それをしようと思うとお金がかかる、ところがおとうさんは出してくれない。おかあさんは、自分の食費なり、へそくりから出さなきゃならなくなります。

ですから自分は引っこんでいて、おとうさんに出てもらおうということになる。そのへんは、どっちが悪いのかわからないんですけれども……(笑声)。

私、PTAの例を考えてみても、たいへん小さいことならば、おかあさんたちで集まっても、決まるんでございますね。だけど、じゃ、ここに体

育館を建てようとか、授業料を値上げしようなどというときは、かならず、おとうさんが出てきて決めてくださるんでないと、決まらないんです。母親は、大部分、経済的無能力者ですからね。

矢野　それはそうです。2、3日前もご婦人の団体が訪ねてこられたけれども、非常におおぜいの奥さん方が、参加してやっておられるけれど、ある金額以上のものは、女の手じゃどうにもできない、ということなんですね。

それは、おとうさんとの話し合いでもって、おとうさんのかわりにやるんだからということで、もう少し、流通機構を円滑にしてもらわないと……(笑声)。

青井　どうでしょうか、犬塚さん。

犬塚　田園調布では、10年ぐらい前からでございましょうか、PTAの仕事は、全部おかあさまの手でやっております。金額の問題も、うまくいくように思います。

矢野　これはやっぱり、おかあさま方が進んでおられるという点があるから、一般の標準にならんかと思いますけれども……。

青井　田園調布などでは、どの家庭も生活程度が、ある程度上だということもあるでしょうね。恵まれた家庭が多いわけですから。

Ⅳ　老人と家庭のしつけ

今のおばあちゃんが一番損をしている？

矢野　その次の話題としては、祖父母のある家庭の場合、そのしつけの問題ですが、これはえてして、きびしいおじいさんとかおばあさんがいて、しかも権力をもっている場合に、自分が育った時代と同じことを、いまの子どもにしつけるというようなことから、波乱が起こるという問題などがあると思うんですけれども、波多野先生なんかごらんになって、どうでしょう。われわれ、そういうことにくわしくないんですが、想像はできます。

波多野　いままでは、たしかに、そのとおりだったと思うんでございます。農村ではいまでも、そういうふうにおじいちゃん、おばあちゃんの権力が強くて、お嫁さんのほうが弱いところが多いようですけれども、都会では、むしろ逆じゃございませんか。

私なんか、同級生に、おばあさん族の仲間が、ボツボツできてきましたが、いちばん損なときに、われわれは生れたんじゃないか(笑声)、お嫁さんのときにさんざんおしゅうとめさんにいじめられ、こんどおしゅうとめさんになったら、お嫁さんのほうが権力があって、うっかりしたことをいうと、うるさいおしゅうとめさんだといわれながら、小さくなっていなきゃならないと話しあったのでございます。

こないだも、ひとり息子をもった人から、こんな話がありました。たいへんいいお嫁さんがあったので、ぜひもらいたいと申出たら、ひとり息子では、おかあさんがさぞやうるさかろう。だから、いやだといわれた。ひ

とり息子というのは、財産でも多ければ別ですが、たいへん条件が悪いのですね。それで、その母親である人は、

「私は、決してなにもいわない。若夫婦は、自分たちのいいように暮らしていいから、どうぞきてください」

といって、結婚を承諾してもらったそうです。だから、そのおしゅうとめさんはかわいそうに、朝、若夫婦が寝てる間に、ごはんの支度を全部しましてね。それから、若夫婦が起きてきてごはんを食べるのだそうです。あとかたづけも、ちょっとぐらい手伝うだけで、出かけるときは、こっちの都合なんかききもしないで出てしまう。

お互いに話しあって、留守番を代り番にするようにしたいと思うけれども、最初に、なんにも苦情はいわないという条件で、もらった嫁だからどうしようもない、という話がクラス会ででまして、なんか考えちゃいました(笑声)。

子どもをめぐる祖父母と父母のトラブル

波多野　それからもう一つ、こんな話もでました。子どもがいっしょに住んでおりますと、子のしつけは、当然その両親が主体にならなきゃいけない。これはたしかに、そのとおりなのでございますけれども、おばあさんも、やっぱり多少は、孫と接したい気になることがあれば、時には自分の意見もいってみたいのですね。つまり、家族の一員として、仲間にはいりたいのですけれども、おばあさんは口出ししてくれるな、というお嫁さんが多いんですね。

それでは、子どもが嫁と姑の間にはいってとまどいます。よい心のしつけをするためにも、よくないのじゃないでしょうか。おばあさんとして、別の離れで暮しているのだそうです。ところが、孫と遊びたくてしようがない。孫もおばあさんの方にいくと、なにかもらえるものだから、いきたいんです。

そこで、おばあさんは縁側でつくろいものなんかしながら、孫が庭に出

てこっち向くのを待っている。そして、親にわからないように、ニコッと笑ったり手まねきすると、孫が急いでくるんですって。

こんな具合でほんの僅かの時間、孫とあそぶのですが、そのときおせんべの一枚もやったり、ズボンの泥をおとす程度の世話をやいたりするだけでも、必らずその日の夕方なり翌日なりに、叱言をいわれるのですって。それも、目撃者のお嫁さんからは、直接苦情がでなくて、会社に行っていて留守だったはずの自分の息子から苦情がでる。

「われわれの子どもの教育は、われわれがするんだから、おばあさんのところで、勝手にあまやかしては困る」

おやつなど時間外にあげたりするのは、私も感心しませんけれども、少しは、おばあちゃんの気持もくんであげて欲しいですね。私がおばあちゃん族だから、いうわけではないけれども‥‥(笑声)。

矢野　それは非常に多いと思います。

青井　これが一番多いんじゃないですか？

波多野　いまは、老若両方にゆきすぎがあって、年寄りも含めて一つの家族であるということの考え方、それがたりないんじゃないでしょうか。

祖父母によって崩されないしつけが真のしつけ？

滑川　そうですかね。私なんか、おじいさんでも、あんまりよくないおじいさんなんですが、孫がかわいくって、孫と遊ぶのがいちばん楽しいんですよね。それで娘にしかられるんです。「いまおやつの時間じゃないからだめです」とか‥‥。

娘にいちいち許可を得なければ、孫をかわいがれないなんて、そんなばかなことはないじゃないかと思うのです(笑声)。たまに、孫が遊びにきたのに、おじいさんがいっしょに遊べない。しかも、とても僕になついているのに‥‥。そこで僕は、娘にこういうんですよ。

「たまに、おじいさんが、時間的にずれたかわいがり方をしても、それによって崩れないのがほんとうのしつけなんで、おじいさんの自然の愛情を

拒否しなければ、しつけができないというのは、娘がしつけの本とかなんとか、活字を過信しているからそういうことになるんだ、それは自然の状態が尊重されるべきだ」というんですがね(笑声)。

矢野　私は、そういう争いの仲裁を、よくさせられたことがあるんですが、両方をみてると、おばあさんもいい人だし、おかあさんもいい人である。両方実にいい人であるのに、お互いに敵になって、両方が悲しんでいる。

孫は50年遅れて生きている
自分、老人は30年後の自分

矢野　母親と若い娘などの場合も同じことが起こる。そういうときに、よく次のような話しをしました。

「あなた方、あんまり自分というものに引っこみすぎて、おかあさんは自分というものに、また子どもは子どもで、自分はおかあさんと違う人間なのだと、対立的になって、ものを考えるからだけれども、僕からみると、お宅はおばあさんから、おかあさんから、子どもさんへずっと一つの血が流れていて、たまたま個体が別なだけで、皆さんは一つものじゃありませんか。

だから、おばあさんから見れば、おかあさんは30年おくれた自分の姿なんで、ああ、この娘も私なんだとお思いなさい。孫は、おばあさんが50年遅れて生きている姿なんで、おばあさんは自分はなくなっても、あの孫のなかに生きているんだ、だからお互いに身体は別に見えるけれど、私は娘の中には30年若い自分が生きているし、孫の中にも生きていると思いなさい。そうすりゃ憎くないでしょう。また、50年前におばあさんが育った時代と同じように、50年後の孫を育てようとすることは、ちっとも進歩がないばかりか、むしろ50年遅れてしまうじゃないですか。だから子どもは、いまの時世に合ったような教育を受け、考えをもつことが当然なので、時代の差による違いがあることが、進歩なんだというふうにお考えになったらどうですか」

というと、だいぶ解決する場合があるんですね。

「それで、すっきりしました」といわれる人もあります。

「だいたい、あなたはいまは、もっともらしいおばあさんだけれども、お孫さんを、あれは自分なんだと思った場合に、もしあなたが、あのくらいだったらどう思います。やっぱり、わがままをいいたいでしょう。その気持ちはわかるでしょう。

《矢野一郎氏》

娘は自分なんだと思ったら、自分が考えてると思って、娘さんのいうこと聞いたらきっとわかります。それから娘さんのほうも、おばあさんは、30年昔に生まれた自分だと思って聞けば、それだけの差があることはあたりまえだ、ということがわかって、両方のいうことがよく理解できますよ」

そういうわけで仲直りしたのが、たくさんあるんですがね。そういう両方の立場の調和が必要なので、おじいさんの立場からの話も理解するというコミュニケーションが、まだ、たりないんじゃないかと思いますね。

事実、私のうちなどでも、子や孫の中に自分のくせや性格などが沢山入っているのを見て、やっぱり自分があそこに生きて居るんだ、などということを強く感じますね。孫を抱いても、そう思って抱いてやっています。孫がいうことも、自分がいっていると思って聞いています。

老人と同居の場合はどうするか

波多野　滑川さんの場合は、たまにお孫さんがくるのでしょう。ですから、しつけがそれでこわれちゃいけないという理屈がなりたちますけど、いっしょに住んでる場合には、毎日ですからね。おじいさんは、おじいさんで、好きなようにやられて、それでこわれるようなしつけでは、しつけ方が悪い、といわれても困りますね。それはむずかしいですよ。

滑川　だから、いっしょに住んでいる二世代家族の場合には、子どもの教育の方針は、おじいちゃんもおばあちゃんも両親も、一つのものをもっていないといけないと思いますね。

波多野　でもその主体は、やっぱり両親でしょう。

滑川　そうですよ。いちばん責任をもつものは両親で、それ以外の責任にしてはいけませんね。

波多野　そして、それにおじいちゃん、おばあちゃんが協力してやるという態勢だったら、いいわけですね。

滑川　ただ若い人たちは、人生の知恵というのは、どうしてもおじいちゃん、おばあちゃんより少ないですね。そういうよさを、もっともっと吸収すべきだと思うんです。自分たちが責任もつんだから、よけいな口出しは困るという態度じゃなくてね。

祖父母はどうしても無責任になる

波多野　お互いに思いやりがあるような、そういうものがあると……。だけど正直いって、滑川さんのお話聞いていて私も自分のことを思うのですが、孫というのはかわいいですけど、どうも無責任なかわいがり方をしてしまいますね(笑声)。

滑川　それはそうです。ぼくなんかも、無責任な愛情だなあっていうふうに思うことあるんですよ。だから、きちんと計画したとおりに育てていって、その子がほんとうに幸福になるのかどうか、そういうことも、娘に考えさせようと思っているんですよ。

波多野　たとえば親の立場で子どもを育てるときは、この子どもにこれをしていいだろうか、どうだろうかというのを、まず考えるわけですね。

ところがおばあちゃんになりますと、子どもに喜んでもらうということが、先になってしまうんです。だから喜んでもらうということは、結局、甘いことで、きのうおもちゃを買って、きょうまた買っちゃいけない、自分の子どものときは、決してしなかったことでも、孫の親に「買ってやっ

てもいいか」ときいて「かまわない」といわれれば、すぐ買ってやってしまう。そして孫がニコニコすれば、それで満足するという傾向はあるでしょう。

滑川　ありますね(笑声)。

波多野　そしてさんざんかわいがって、こっちがくたびれると、それで帰してしまう(笑声)。それはうるさいというよりも、責任はむこうですからね。そのへんの態度をもう少し反省して、われわれおじいちゃん、おばあちゃんも子どもの家庭教育に協力する態勢をとるよう、はっきり自覚しなきゃいけないでしょうね。

老人っ子はよくいけば味があり
悪くいけばオシャマになる

犬塚　私、小学校の先生からうかがいましたんですけど、おじいちゃま、おばあちゃまのいらっしゃる家庭に育った子どもと、両親だけの家庭に育った子どもと比べた場合に、全部ではないでしょうけれども、祖父母のある家庭に育った子どものほうが、なんとなく幅の広い深みのある子どもが多い、ということなんですが、やはりそれはうまくいってる場合のことでございましょうね(笑声)。私の周囲でも、そうでない場合の方が多いように思います。

波多野　それから、どっちかというと、おしゃまな子ができやすいんです。形式的なしつけは、どうしてもおじいちゃん、おばあちゃんはやかましいですからね。しかしたいへんうまくいけば、幅もできますでしょうね。

矢野　一面に、しつけ方ということでは、今の若いおかあさんたちの方が、知識的には、おじいさんおばあさんよりも上でしょう。それはまだよくこなれていないとしても‥‥。そういうことは、だいたいにいえるんでしょうね。片一方は、自分の接してきた社会だけからの経験だし‥‥。

波多野　ただ、うっかりすると“教育ママ”ができる。

滑川　“心理学ママ”にもなりますな。

波多野　“心理学ママ”というといやだから、“教育ママ”というんですけれども‥‥(笑声)。

時実　どうですか、波多野先生、いまのおかあさん方は、しつけという面で、いいおかあさんになろうと努力していらっしゃる。

老人は必ずしも古くない

ただ、それは流行とか、あるいは本があるから読まなくちゃいかんということで、知識はもっていらっしゃるんですけれども、いいおかあさんになろうと思えば、年の功のおじいさん、おばあさんに協力を求めるという広い態度があっていいですね。

そうでなくておじいさん、おばあさんは協力しなくちゃいかんといわれても、協力を求めてくれなければ、隠れても子どもをかわいがるということになりますから‥‥。

V　発達段階に応じた「しつけ」

脳の発達段階と「しつけ」

矢野　家庭の問題は、だいぶ根本問題が長くなりましたから、そのへんで、次に子どもの発達段階としつけのことに入りたいと思いますが、これはどうしても時実先生に教えていただかなきゃならないんですが、しつけというものにも、人間としての発達段階に応じたいろいろなしつけ方があると思うんです。

そこで、それを考慮していないしつけ方や、まちがっている点なども、日本にはたくさんあるんじゃないかと思うんですが、そのへんをひとつ。

時実　長い年月の体験からいままでいわれていることは、やはり正しいと思うんですね。

最近、学問的に調べて、なるほどそういうことはいいんだな、と感じられる場合が非常に多いと思いますね。たとえば「三つ子の魂」とか「三歳児」というのは、ちょうどそのころあたりまでに、脳の受入態勢が急速度にできてくるのです。

それから学齢期ごろになりますと、欲がかなりでてきて、ただ教えるというだけでなく、自分からなにか求めようとする。そこで、3歳ごろと学齢期のころに、自分を認め自分を主張しようとするようになります。これが反抗期というわけです。

20歳ぐらいで、脳のほうも肉体のほうも完成してきます。20歳になると成人式をあげて、おとなの仲間入りをするわけです。そういうことで、20歳に成人式をあげるのは非常に合理的だと思うんです。

受入態勢のできてないときにむずかしいことをしつけても、これはどうにもならないし、反対に、せっかくちゃんとできているときになんにも与えないと、うつろになっちゃいます。つまり乗り遅れないように、そしてまた、電車がこないうちに乗ろうとしないようにということになります。

矢野　波多野先生のお話のなかにも、小学生の時代と中学生の時代とでは、親に対する態度が逆になるとかいうことがありましたが、いまの三歳児までの問題にしても、またこのお話の問題にしても、そういう基本的な変化というものだけは、今後至急に社会の常識にしなければいけないんじゃないでしょうか。

時実　今の波多野さんのお話のようなことはあると思いますね。

おしりの「しつけ」が早すぎる？

波多野　日本人は、おしりの始末を早くしようと、努力しすぎてないでしょうか。

時実　それはらくだからじゃありませんか。

波多野　だいたい、お誕生におむつがとれるというのを理想にしてますね。それでやりますと、かなり努力しなければできないわけなんです。

それが日本人を神経質にしてやしないか。1年3カ月ぐらいですと、そんなに努力しないでも、だいたい離れてきますね。だとすると、そのへんにちょっと無理があるんじゃないかという気がするんですけれども、そんなところはいかがでございましょうか。

時実　自然にそうほうが、ずっといいと思います。早くすれば、それだけおかあさん方の手がはぶけるということがございますから、そうなるんですけれども、かえって、子どもの心をひねくれさしてしまうようになるのではないかと思いますね。

波多野　このごろ、私のところに相談にくる方のなかに、かえっていつまでも、おしっこを教えなくなったのが多くなっています。これがこの4〜5年、ことに多いんでございますよ。

それから、ウンチらしいので、させようとすると、きっと部屋の隅へ逃げ出して「出ない、出ない」といいながら、おもらしするようになったとか、いろいろおしりの始末について、うまくいかないという相談が多いんです。

これは、無理に早くしつけようとしている、おかあさんたちの影響ではないかしら、と考えるんですけれども、時実先生にぜひうかがいたいと思って……。

時実　自然に発達してくるものですから、私はとくにああいうものは、自然の姿にそうようにしたほうが、いちばんひずみのない、しつけ方ができると思うんですね。かえって、しつけることによって、ひずましてしまう。これじゃ、しつけにならないと思うんです。

波多野　あまり早くから便器をやめて、お手洗にいかせようとしたために、お手洗にいくとどうしてもしない子や、4歳ぐらいになるのに、まだおむつでなきゃしないなんていう子どももあります。ほかのことはなんでも普通なんですけど……。

時実　子どものノイローゼ的なものですね。

青井　発達段階というのは、全部決めるわけにはいかないでしょうけれども、だいたいこのころは、この程度というのをある程度知ってないと、経験だけじゃちょっとわかりませんですね。

時実　でも、いまのおかあさん方は、いろいろ本をお読みになったり、勉強していらっしゃるんじゃないですかな。

本は平均人をつくる

波多野　それだけに、こわいんでございますね。標準に合わせて、ものをしようとしすぎるところが……。

その子ども、その子どもで、いろいろ幅があるわけですから、それを考えてやらなきゃいけないんですけれども、それを考えないで、どっちの面でも標準を気にしすぎて、しつけようとする傾向があります。

時実　ですから、かえって安心感をもっちゃうんですね。この本に書いてある、このとおりやればいいんだということで、かえって、子どもを不幸にしているということがあります。しつけやその他の知識をもっていらっしゃるが、それがほんとうの知識であるかどうかですね。

波多野　しつけの知識でなく、しつけの態度を養わなきゃいけないんですけれども、態度を養わないで、知識を吸収しようとするからむずかしい。

「親のため」ではなく、「子どものため」のきびしさを

滑川　幼児期にやらなきゃならないしつけを、幼児期にやらないでおいて、小学校3年ぐらいになって母親のいうことを聞かなくなったとき、あわてて、どなったりたたいたりする。逆にしなくちゃいけないのに‥‥。

生活の習慣というのは、基本は幼児期で形成されます。たとえば読書の習慣なんていうのを考えても、幼児期に絵本で読書生活の基本をしつけた子どもは、やっぱりいいですね。

習慣というのは、狭い意味のしつけですけれども、幼児期にきびしくやるということ、これが一般に日本ではたりないですね。しつけの時期を考える必要がありますね。

矢野　その点は、日本における、家庭のしつけのたりない点の一つじゃないですか。

外国で見てますと、そこに根本的な差があるような気がしますね。波多野先生のいわれる、きびしいしつけというのが必要なのだが、日本では非常にこわい、しかりつけるという観念だが、むこうのはそうじゃなくて、冷静に考えて、整然としてそれをずっと長く、習慣的にやっていくというようなきびしさじゃないですか。そういうものが日本にはない。

波多野　子どものためにきびしいんですね。日本できびしい場合には、たいてい、親がカッとなったとき‥‥(笑声)。

青井　あるいは、他人のために気がねしちゃってやるとき‥‥。

波多野　そういうことでございますね。だから、その子のためのきびしさというものが、もっとなくちゃいけない。

青井　おとなというのは、自分が一ぺん通り越しているんだから、よく知っているはずなのに、案外、自分の過去については忘れっぽいんじゃないかと思いますね。

波多野　それから、都合のいいように覚えてる、ということもありますね。かなり形を変えて‥‥。

幼児期・小学3年・14才
――性格形成の重要時期

滑川　発達段階のなかで、どうも幼児期のしつけと、小学校3年ぐらいのしつけ、これが二つの重要な、もりあがるヤマ場じゃないかと思うんです。

もう一つは14歳、これはおとなの世界、人生への入口という意味でだいじです。去年から私どもが提唱して「14歳立春の式」というのをやっているんですが、その時点から悪くなる子はぐっと悪くなるし、だいたい14歳で、性格の形成というのは終わるんじゃないかということですね。

これは私の教育経験でもそういうことはいえますが、三宅正太郎さんという、戦前、司法次官をした方が、不良少年の感化をやったんです。いわゆる根性を変える、性格を変えてやるというので、一生懸命におやりになったんですが、その結果、「14歳をすぎると、性格を変えることはもうできない。そういうことがよくわかった」といっておられました。私も、どうもほんとうじゃないかと思ったんです。

だから14歳までが、教育とかしつけの期間じゃないか、もちろん、その後も、変化というものはありますけれども、根本的に性格を変えることは、ほとんど不可能じゃないでしょうかね。

矢野　それが50、60になったらだめです(笑声)。これがコミュニティの問題のいちばん大きなガンですね。いまの日本を預かっている人に、こ

うういうふうにおやりなさいといったって、もう50、60になった人の頭ってものは変わらない。理解はできるけれども、そこまで自分がついていくというほど、自分の考え方を変えることは、できないじゃないかと思うんです。

デンマークの農業改善には60年かかった

矢野　私は昔、デンマークに行きまして――大正の地震の前年でしたが、ちょうど日本の農業ってものはどうなるか、心配だとみんながいってるような時でしたから、スイスのような農業国になるべきか、デンマークのようになるべきかという論議が盛んにされた時代でした。

デンマークの歴史をみると、戦争に敗れて領土は狭くなるし、人口は多いし、それでまた方々に、カナダやソビエトの大農法がおこってきた。そこで、いままでのような農業で、米麦ばかり作っていてはいかんというので、すっかり建て直して、今日のデンマークが農業国として、立派に栄えるようになったという歴史が、その頃でも、すでに60年位前からあったわけです。多少それを調べてきたんです。

帰ってきたらすぐに、デンマークの本を書けといわれて、まあ恥ずかしい話だけれども、大学を出たばかりでデンマークの本を書いた。デンマークが建て直った二つの柱というものはその一つは国民高等学校(フォークス・ハイスクール)というものができて、国民教育を全部やり変えて愛国心を育て、みんな協同して、デンマークをつくり変えるんだという教育を、年齢かまわず農村でやったんですね。村長さんの家みたいなところへ、農閑期に男女がみんな集団で泊り込んで、国の歴史を聞いたり、協力精神を養ったりした。

それが一つと、もう一つはコオポレイティブ・ムーブメント(協同運動)の奨励と発達で、今ではデンマークが全国一つになった協同体という所までいっているということ、その二つが成功の鍵だった。

ところが、いつそれが成功したかということを調べてみると、その源はみんな60年も前にさかのぼるんですね。その頃から、識者は口をすっぱくしてそういう運動を起こし、学校もほうぼうにできてやっているのに、それが実際上、役に立ってきたのは、おそらく50年後、まあ50年とまではいわなくても、30年位はたってからであった。

つまり昔、国民高等学校にはいった若い人が、後に世帯主になって実権を握った時代になって、はじめて実効が上って来たので、それまでは、ごく少数のパイオニア（先覚者）だけがやってるけれども、大多数の農民はついてこない。だから、人間の考えを変えるということは、年が50、60になった者に対してはだめだ、とある書物にも書いてあるんです(笑声)。

それで日本のコミュニティの問題も、いまいろんなことをやっても、そのききめがでてくるのは、いまの若い人が一人前になったときに花が咲くんじゃないか。しかしそうかといって、そのときまで待つことはできないから、やっぱり、今から気長にやらなきゃいけないんだということを感じるんで、ことに人間の性格ということになりますと、いまのお話のように、12、13までにできてしまうんじゃないでしょうか。そういうことを考えると、コミュニティは、子どもをしつけることについての、いちばん大事な要素ですね。それを親は知ってますかね。

性格教育は幼児期から

波多野　なにしろ、非行少年がほんとうに更生できるかどうかを決めるのには、その子どもが、幼児期にどんな扱いを受けて育ったかということで、だいたい決まるということですね。ですから、幼児期がいちばん大事で、その次は青年期で、この時期では親よりむしろ友達の影響が強いように思うんでございます。いい友達をもてば、かなり不良になりそうな環境にいても、いい性格に成長しますね。

青井　先生の前のお話にもありましたように、人間形成の上で、家庭に欠けているものをコミュニティで補うという意識が、非常に重要だと思う

んですけれども‥‥。

波多野　それが友達、またはコミュニティでしょうね。しかし日本のコミュニティでは、それができていませんから‥‥。

《青井　和夫氏》

矢野　しかし、その前に問題があるんで、幼稚園へいくぐらいまでに性格ができてしまうとすれば、いままでの日本の考え方のように、子どもが学校へはいってから、「先生、よろしく願います」といえばそれでいいと思っていたのでは、もう遅すぎるのだということが、非常に大きな問題でしょうね。厚生省もあわてていると思うんですけれども、文部省の義務教育なんていうのも、いままでのような考えでは、適当でなくなってきて、もっとずっと幼ない時に、ほんとうにりっぱな国民をつくるべきところがあることが、はっきりして来た。それはどこにあるかというと、現在は家庭にあるわけですね。

Ⅵ　学校教育と家庭教育

学校の家庭科はこれでいいか

波多野　ところが学校の教育のなかに、そういうことの必要さを教えるほんとうの場がないんじゃないでしょうか。大学でも、一般教養で心理学をとりますね。でもこの一般心理学では、家庭生活に役立つことは教えてくれません。これは国民全体に必要なことなのですから、義務教育の最後の中学3年で教えなければいけないのですが、あの年齢の家庭科で、家庭のあり方とか結婚の問題を取扱うのは、むずかしいでしょうしね。

このごろは、中学卒業者の60何パーセントも高校にはいるんですから、高等学校でやってもいいんでしょうけれども、高校3年間は、日本では大部分が受験に追われてますから、そんなことを真剣に考えないんでございますね。また文部省でも考えてないようですね。

アメリカの高等学校では、社会科の時間に、男の子と女の子が結婚の問題を討議します。参観にいきましたら、偶然その問題を討議しているところでしたが、男の子も女の子も真剣でした。いったい、どういうふうな知り合いのしかたをしたときが、いちばんうまくいくだろうかとか、結婚するまでに、どういうつきあいをすべきだろうとか、婚約の期間はどのくらいが適当だろうかとか、家庭というものは、どういうふうにして育てていくのがいいか。また、親の生活と子どもの生活とか、いろいろな話し合いが出ました。

アメリカはご承知のように、いろんな国から人がはいってきていますか

ら、祖先の国がいろいろなんですね。そのせいもあるのでしょうか、子どもの考え方にもかなり幅があって、たいへんおもしろく、また参考にもなりました。日本の高等学校では、クラブ活動でも、そういう場はないんじゃないでしょうか。

正確な知識なら、百科全書にはかなわない

矢野　ないでしょうね。またあっても、いわゆる知識教育だけになって、いろんな知識は教えてくれるけれども。どうも私は、知識というものは、あるいは百科辞書を見たほうがたしかで正確なこともあるんだから、そんなことよりも、むしろ知識をちゃんと使える人間の土台が、できてないということがこわい。むやみに正しい土台の出来ていない人間に、知識を注ぎ込むのは、非常に危いことでしてね。

そこいらに問題があるんで、しつけというものは、学校の成績がいいとかなんとかいうこととは別なものだから、学校教育においても、人間の本質をしっかりつくってくれるというところに重点をおいて、それができあがれば、あとはどうでもいいという教育に、もっていってもらいたいと思うんです。どうもいまの、いい学校へ入れたいとか、どこの学校を出たらどうだとかいうような知識偏重主義は、大きな意味で教育というものを学校における、しつけと考えれば、しつけには、なっていないんじゃないですかね。

家庭生活の必要項目はどこで学習しているのか

波多野　女の子のお嫁にいく前の態度について、調べてみました。お嫁にいく前に、いい家庭をつくるための、心のしつけを身につけよという人は、ほとんどないですね。自分はどんなところへお嫁にいくかわからない。ですからこのあとの1年か2年は、できるだけ楽しく暮らしていこう、ほとんどがそういう態度なんです。

また親も、いまのうちだから、少しおけいこごとをちゃんとするなら

ば、あとは好きにさせるという態度をとっています。そのおけいこごとというのは、家庭の毎日の生活のなかで、必ずしも大事なものじゃないんです。お茶とかお花とか‥‥。

これもあっていいけれども、もっと大事な生きていく態度とか、そういうものは抜かして、目に見えるもの、いわゆるおけいこ事が第一になっている。

そしてお嫁にいって赤ちゃんが生まれると、こんどは、からだをこわさないように目方を少しでもふやすということだけを夢中で育てます。やがて幼稚園に入れると、次はいい学校をめざして、学校の成績だけを気にして育てていくんですから、いいしつけが、できようはずがありません。ですから、今日の日本の教育全体を見ますと、いったいどこでしつけたらいいのか、しつけようとしても、しつけられないようになってるんです。

矢野　これは我田引水なんですけれども、私は剣道を50何年やっているんです。きょうも早朝から寒げいこをやって来たんですがね。先頃、「孫を剣道で鍛える」という随筆を日経に書いたら、さあ、うちの子も頼む鍛えてくれといわれて、いまは道場の収容限度まで、小学生、中学生、高校生、大学生などを預かっているんですけれども、これなども実は、自分の孫が少し内向的で気が弱い方なので、娘が「おじいちゃん、少し剣道で鍛えてくれ」というのが始まりで、小学校の3年生の時に教えだしてみたら、性格がめきめき変わってくるのですね。

剣道が子どもの性格を一変させる

だから、なんかああいうものを、あの時期に与えるべきであったのが抜けていたのだ、ということを感じます。

それから剣道をやるといったって、みんなが剣道の先生になる必要はないんで、剣道はなんのためにやるんだということを、このごろ折りにふれて、いろんなものに書いたり話したりしてるんですが、剣道というものは

人間をつくり出す、人間の本質をつかむ。

これからの世の中というのは、非常に忙しくもなるし、複雑にもなる。ちょうど剣道の道場に立って、相手がポンポン打ってきても、落着いて大事なものだけ見さだめて、よけいなことには、自分の心は動かされないことが大事だ。

ものの実体をちゃんとつかんで、的確な判断をし、的確な措置をするのが剣道の修行なのだから、相手の全体を見て、その実体を判断し、そしてそれに応じた処置をする。この三つのことを勉強するのが剣道だと、しじゅういってるわけです。

「この子はもう大丈夫」
——見なおされた子ども

矢野　孫のなかに、中学校の女の子がいるんですよ。それが、中学校でどこかの部にはいらなくちゃいかんといわれたので「あたし、剣道部へはいった」というんです、女の子が(笑声)‥‥ちょっと驚いた。しかし誰にもすすめられたわけではなく、全く自分ひとりの考えで剣道部にはいった。

「女の子もいるのかい」

「3人いるわよ」

というんです。珍しいな、どうしてそういう気になったのかとは、別に聞きもしなかったんですが、そのうちに「あとの人はやめちゃって、あたしひとりになった」といってました。

そしたらその子が、この間、学校で急に盲腸炎になったんです。校医さんにそういわれた。先生がついてきてくださって、自分で近くの病院にいきまして——そのとき、親はうちにいないんです。おかあさんはどっか買物に出て留守だった。うちには妹がいた。実は、私どもの隣にいるんですが、私の家内も、なんか夜の集まりがあるので私の会社へきていて、うちにいませんでした。

すると、会社へ妹から電話がかかってきて、いまお姉ちゃんが盲腸炎

で、これから病院で手術する、すぐ帰ってきてくれ、というので、家内は急いで帰ったわけです。

そうすると、私も実に感心しちゃったんですが、病院で盲腸炎だということがわかったら、これは一刻も早く切ったほうがいいと言われて、まず病室があるかないかをちゃんと聞いて、個室はないけれども、おおぜいの部屋にベットが一つあいていたので、それをちゃんと頼んで「先生、切ってください」って自分で申し出た。両親が留守のことは知っていた。それから入院するのに、これこれを持ってこい、というのが書いてあるものをもらって、妹に電話をかけて、何と何とを持ってこい、といってるんです。私の家内がいったら、もう手術室にはいっていたそうです。まだ15ですからね。いままで15の女の子なんてバカにしてたんだけれども、それ以来、誰でも「この子はもう大丈夫」だっていってるんです。たとえ学校の成績はどうでも、もう大丈夫だという気がするわけです。

これなぞも、世の中へ出ていちばん大事なことは、ものの実体を正しくつかむこと、そしていちばん的確な判断をして、いちばんいい処置をするんだということを、その通りやっただけなんですね。そういうことを、私はとくに孫にいったことはないんですけれども、書いたものなどを読んだのかも知れませんが、やっぱり、おじいさんといっしょにいたということの影響から、それだけのものが身についたとすれば、これはじいさんも役に立ったと思うし(笑声)‥‥、それから学校の先生にも非常にほめられて、男の子たちもたくさん見舞にきまして、「見直したよ」「見直したよ」っていったそうです(笑声)。

生物としての人間と社会人としての人間——どの年頃に何が欠けているかを考える

矢野　一体その位の年ごろでは、そういうものを、なんかつかむということは、まず珍しいことなんですね。その意味で、なにを習わせてもいいですけれども、たとえば剣道なんていうも

のを教えるとしても、ただ技だけを教えないで、人間づくりにも役立つような教え方を、心がけてやっていってくれると、知識教育以外のものができるように思うんです。なにかそういったものが、今の教育には欠けてますね。先生の頭にも、人間をつくるという考え方が、欠けてるんじゃないですか。いい先生にぶつかりゃいいんですけれどね。

青井　その問題になりますと、われわれの日常の生活習慣だとかそういったようなものが、非常に大きな問題になってくると思いますけれども。

矢野　しつけの問題というのは、対象になる人間がみんな違うし、条件が違う、環境が違う、関係してくる人間がみんな違うという意味において、非常にデリケートな問題でしょうが、しかしそういう特殊事情下にあってもなお、その全体の上に、人間の持ち寄った総ての知恵の中から、いまの日本では、こういうふうにあるべきだという線を見出して、先生方のおちからであるパターンというか、指導の方向というか、大衆がたよってゆかれるものを示して頂くことが、必要なんじゃないかと思うんです。

それだけに、たよることではもちろんいかんけれども、それを杖にして、自分も個々の実際問題について努力しようという、おとうさんおかあさん方の考えなり決心なりが必要なんじゃないかと思います。なんのために、そういうことが必要だということになると、子どもたちが社会人としてりっぱに責任を果たしていく、いいコミュニティの一員となるために、ぜひとも必要なのだということが基本でしょう。そして、その基本的な考えがやっぱり、しつけの中心にはいって来なければ、本当ではないというふうに、私は考えるんです。それと私自身では、常に人間は、やっぱり生きものなのだということを強く考えるんですね。生物としての自分を考えていく、生理的な人間としての自分を大事にして、生理的な人間の特徴といったものを、大いに尊重し活用していくということが、近頃の日本人にはたりないんじゃないか、という気がします。

むやみに子どもを都会の学校へ入れたがるとか、毎日不健康な享楽にふ

けるとか、人間というものを忘れて、金とか物質とかを中心とした考え方の社会にだけ、しあわせがあるように考えがちの世の中ですが、生きものとしての自分を育て、また子どもを育てるという責任と、もう一つ、健康な社会人を育てる義務とを2本の柱と考えてやっていかなきゃいけないんじゃないかということを感じるんです。

「期待される人間像」の問題点

波多野　こないだの「期待される人間像」というのは、しつけにつながるものだと思うんですけれども、結論のときには、ああいうふうでなく、もう少しイメージのわくようなものにした方がいいと思いますね。

ああすべし、こうすべし、ああであれ、こうであれ、ときめていきますと、幅のある面白い人物が生まれてこないような気がします。

ですからむしろ、それよりも、人として、またコミュニティとしてこれだけは欠けては困るというものをみんなで考えあって、その線を出していったらどうでしょう。人間がいっしょに暮らしていくには、どうしても必要なことがいくつかありますね。

たとえば「お互いの生命を大切にする」とか、「約束を守る」とか、「全体の調和を考える」とか、そういったものを先に打ち出して、それだけは鉄則にしていくというふうにしたら、個人は自由でありながら秩序ができて、いいコミュニティをつくることにもなりましょうし、共通のそのコミュニティでの家庭のしつけを根本にしながら、その上に各家庭の特徴といいますか、新しい時代の「家風」といいますか、そういったものを加味して、家庭教育といったものをしていくことができるのじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。

家庭のしつけの独自性と共通性

青井　この間その点についてわれわれ話しておりまして、質問がちょっとでたんです。

新しい家風というものを各家庭でつくるべきだということと、それから、隣の子どもも自分の子どもと同じように取扱うべきだということと、つまり、家庭の独自性の確立と隣の人との共通性の獲得とを、どう両立させるかという問題がございますね。

その点が波多野先生、日ごろお考えになっている点を補っていただけませんか。

波多野　たとえば、あるクリスチャンの家庭で、自分のうちはクリスチャンの家庭として、宗教的情操豊かな家風を築いていこうと考えるかもしれません。また、お隣の家庭の中ではかくしごと(秘密)は一切しないという生き方を、家風にしていこうとするかもしれません。

こんなふうに、各家庭が自分たちの人生観にもとづいて、それぞれ異なった生き方をしていく。するといろんな人がいて、社会がたのしくなりはしませんか。

ただし、コミュニティとして最小限度守らなきゃならないもの、これは家風の根底になるもので、これはコミュニティに共通したもので、みんながもっていなくちゃならない。それにプラスするものが、それぞれの家風になってでてくる。そしてその家風の中で育つ子は、そのコミュニティと両親のつくった家風を身につけながら、自分らしさを出していく。それが個人の個性となって、でてくるんじゃないかと考えております。

能力と成績と肩書きは別物

矢野　それから、しつけということじゃないかもしれないけれども、その子の特質、なにを育てたらこの子はいちばんしあわせになるかというものをみつけて、それを中心に育てていくという考えは必要じゃないですか。

波多野　大事でございますね。それからその子の能力ということ‥‥。

矢野　才能と能力ですね。

波多野　私たち心理学や教育畑の者は、子どもの能力を問題にし、判断

の資料にします。能力を度外視して、無理をさせてはいけない。子どもの能力に合わせて学校や職業を選べ、というようなことを、しきりにいってるのでございますけれども、これは子どもが、ほんとうに能力を出している場合のことなのです。

ですから、その点をはっきり見きわめるのが大切で、実力を出しきっていない子どもの場合に、その出てないままで評価しては、間違った指導をすることになってしまい、それでその人が、折角もっていたものが出せなくなれば、本人がしあわせにならないばかりでなく、社会的国家的にも損失ということさえ考えられますね。

ですから、もし能力を出しきっていないなら、その隠されてるものを引出してやらなきゃならないわけで、それは両親の大事な仕事だと思うのです。もちろん先生にもお願いするわけですが、先生はなにぶん大ぜいの子どもを扱っていらっしゃるので、あまり先生にだけ期待するのは無理でしょう。

矢野　お話のなかのオーバー・アチーヴァとアンダー・アチーヴァですね。

波多野　はい。オーバー・アチーヴァというのは、努力型で、実力以上の成績をとっている子ですね。こういう子をその学校の成績だけに合わせて、一流校に入れたりしますと、いきが切れて、次第に成績がさがっていきます。その結果、あせりや、不安が出てきて、のちの伸びが悪くなります。アンダー・アチーヴァというのは、実力を出し切っていない子ですから、その子の性格にあったような学校なら、多少背のびでも、かえってそれが刺戟になってのびることも決して珍しくありません。ただし、できればなるたけ早く、アンダー・アチーヴァになっている原因をみつけ出して、直してしまうことですね。

ところが、どうも日本の家庭では、学校の成績とか、あるいは、はいっている学校とか、おとなになれば一流の会社だとか、そういうもので、そ

の人間を評価するのが、あたりまえになるものですから困ります。

ですから、なにはさておいても、いい学校へいれよう、少しでもいい成績をとらせよう、これが第一で、しつけはまあまあということになっているのが実状でしょうね。

その悪い結果が戦後20年、近頃になって、子どもの上に、また社会の中に、かなりはっきり見えてきたように思います。理事長さんがこの会をおつくりになっているのも、そうならないように、まずお互いの小さいコミュニティで気をつけあうということからはじまっているのでしょうね。

Ⅶ　新しい「しつけ」への提言

いいコミュニティをつくるための「しつけ」

矢野　時間もきますから、このへんで、いいコミュニティをつくるのに、家庭のしつけはどんなものをしたらいいか、またコミュニティの側からいっても、いいしつけの型をつくり出すためには、どんなことが必要かというようなことを、まとめてみたいと存じますので、ご出席の先生方に、なんでも結構ですから、1、2点ずつこういうことが大事じゃないかということを、お話しねがったらどうかと思います。

剣道の話を申し上げたんですけれども、剣道の道場だとか、ボーイスカウトとか、青年団というふうなものも、社会におけるしつけの大きな役割をするんじゃないかという問題もあるかと思います。

どっちにしても、結局はみんなの協力とか、コミュニティ精神というものが土台となって考えられなきゃならんわけで、ひとつ忌憚のないところを‥‥。滑川先生いかがですか‥‥。

「お手伝い」はしつけではない？

滑川　私は、家庭教育というのは、理事長さんのおっしゃったように、社会生活の単位であり、協力的な集団なんで、それが家庭生活だという自覚を家族がもつようになること、そのなかで自己実現（セルフ・リアライゼーション）していく、その過程が家庭教育ということじゃないかと思うんですがね。

協力的な社会の連帯生活のなかで、自分をいきいきさせていく。子ども

は子どもなりに、おじいさんはおじいさんなりに、自己実現していくことですね。そういうことを自覚して、しつけというものを考えないと、親の恣意的な子どもをつくることが、しつけだと思ったりするまちがいがでてくるんじゃないか。

そういう観点からいうと、たとえば「お手伝い」というのは、私その意味できらいなんですよ。おかあさんが忙しいから、子どもにお手伝いさせる。

そうじゃなくて、自分の家庭生活のために、みんながそれぞれの立場からある役割りをもってやる。おかあさんはおかあさんの仕事、おとうさんはおとうさんの仕事、1年生の子どもは1年生の能力に応じた家庭の仕事をする。そこではじめて、社会性のあるしつけというものがでてくるんじゃないかと思うんです。

「暗がりよりも嘘をおそれよ」

滑川　それから私は、家庭教育になにか中心になる柱をたてたいということを、いったり書いたりしてきたんです。

私、たいへん強い感動をもったのに、「ジェーン・アダムスの生涯」という、ジェーン・アダムスがおばあさんになってから、自分の一生を回想して書いた本があります。そのなかで幼時のころ、おとうさんにいわれた言葉を、生涯忘れなかったと書いています。それは自分はたいへん臆病で、2階から暗がりの階段をおりられなかったが、ある日、うそをついたんで、下のおとうさんの部屋へおりていって、あやまる話が書いてあるんです。そのときにおとうさんが、

「暗がりよりも、ウソを恐れなければいけませんよ」

と教えたんですね。その言葉がずっと胸のなかに生きていて、青年期の誘惑の多かった時代にも、その言葉を思い出して、自分はまっすぐな人生を歩いてきたんだ、ということを回想しているんです。

そこでは、クリスチャン・ホームだからかもしれませんが、一家そろって、「うそをいわない」ということが、中心になっていたわけですね。ですから、これはそれぞれの家庭ごとに、「責任をもつ」でもいいし、「協力」ということでもいい。

文部省の道徳指導だと36項目あるんですけれども、36なんかいらない、一つありゃいいんじゃないかと思うんですが(笑声)。一つずつが、みんな中心的につながっているものだから、そういうものをなにか一つ打ち出すということで、さっきのお話の新しい意味での家風というものが、つくり上げられるんじゃないかと思うんです。どっからか、もってくるんじゃなく、みんながそういう形で形成していく、つくり出していくようでありたいと思うんです。

しつけの四本柱——バイタリティ・メンタリティ・ソーシャリティ・モラリティ

滑川　それから、なおひとついわしていただくと、しつけというのは、一つはバイタリティ(活力)の問題で、つぎにメンタリティ(知力)、第三にソーシャリティ(社会性)、第四にモラリティ(道徳性)、この四つの面があるんじゃないかと思うんです。

そのなかで、いま子どものたくましさといいますか、バイタリティに関するしつけというのが非常にたりないんじゃないかと思っているんです。

たとえば、いまの子どもたちを見ても、私どもの子どものときとちがうのは当然でしょうが、たとえば遠足というと目的地まで歩いていったもんですね、いまは学校の門のところへバスがきて、目的地までバスでいって、弁当食べてまたバスで帰る(笑声)。あれじゃ、もう足が弱くなるのもあたりまえでしょう。

第一、このごろの子どもは姿勢が悪いのです。だから戦時中の「気をつけ」がいいということじゃなく、なにか子どもを鍛えてやるというしつけが、学校教育のなかでもたりないんじゃないでしょうか。家庭教育のなか

でも、たりなくなっているんじゃないかと思われます。過剰保護をしているのです。そういう意味のバイタリティの育成がだいじですね。

「記憶」より大切なのは「推理力」と「執念」

滑川　それと関連して私、湯川秀樹先生と、長野県の教育研究集会でお会いしたとき、湯川先生がこういう話をしたんです。「科学時代の教育」というテーマで、自分は中学校、高校時代に、暗記ものはあんまりいい点がとれなかった。しかし高校時代に、創造的な仕事をするためには、記憶力がいいだけじゃないだろうということを考えた、というんですね。

そして、高校を卒業するときに、一つのことがわかった。それは「類推する力」だ。ある一つの問題が解決したら、つぎの新しい問題にぶつかって、前のアプローチ（手のつけかた、問題のとりあげかた）でこれも解決するんじゃないかというふうに思うのが類推作用です。そのことが非常に大事だといわれました。

もう一つ、「執念」という言葉を先生は使われたけれども、一つの目的を達するまでに、人間だから横道にいったり、つまずいたり、いろいろなことをやるけれども、やっぱり、最後のものを忘れないで向かっていく心の姿勢と努力、それを「執念」といわれたんじゃないかと思うんです。

これを、「科学時代の教育」で尊重してもらいたいという話をされて、私、非常に感動して聞いたんですよ。いまの家庭教育にも、そういう意味のたくましさとかきびしさというもの――「しつけ」というのはそれにつらなるのですが――それが欠けているんじゃないかと思います。

基本的な生活習慣と人としての振舞い――とくに後者には父親の影響が大きい

矢野　時実先生、どうぞ。

時実　お二方がすっかりエッセンスをおっしゃってしまって、なにも申し上げることはないのですが、私いつも考えておりますのは、しつけという言葉には二

つのねらいがあると思います。

第一は、さきほどお話のでてきました、「基本的な生活習慣」を身につけるということ、それから第二は、「人としてのふるまい」を身につけさせるということではないかと思うんです。

生活習慣のほうは、最近はいろいろ書物もございますから、多少、親が手をはぶく意味でゆきすぎの点もなきにしもあらずですけれども、わりにおかあさん方も、知識としてはもっていらっしゃると思うんです。

ですから、そうまちがった生活習慣を身につけるということは、ないんじゃないかと思います。

しかし、人としてのふるまいを身につけさすということになりますと、身につけさす親や先生方にはっきりした正しい人間像というものがまずなくてはできないことです。おとうさんやおかあさんの考え方が違っていては、しつけになりません。

おとうさんとおかあさんのおふたりの共通した考え方というものが、そこに打ち出されてこないとできないことでしょう。いい学校へ入れるということが、いまのおかあさんやおとうさん方のねがいでしょうが、それがはたして正しい人間の姿であるか、人間の幸福であるか、お互いによく考えてみなければならないことです。

各家庭で、夫婦で、あるいは子どもをまじえて、たとえば人間のあるべき姿についてお互いに考え話しあう時間を、どれだけもっているでしょうか。ただお互いに勝手なことを考えているんではないでしょうか。これでは、ほんとうの、しつけということは、できないと思います。

学校と家庭という「しつけの切り売り」をやめよう

時実　それから、もう一つつけ加えたいことは、学校に対して教育を期待しているんですが、学校教育と、一方では家庭教育、このつながりがないんではないかということです。

矢野　ほんとにないですね。

時実　ＰＴＡができて、家庭と学校とのつながりがよくなったことは、たしかですが、ＰＴＡというのは、子どもが学校にあがってはじめて、家庭とのつながりができるのですね。

矢野　お医者さんは、生まれたときから家庭医というものになって、それではじめて立派な健康管理ができるはずです。病気になって突然みてもらうというのでは、ほんとうの健康管理はしてもらえないと思います。それと同じでして、できれば赤ん坊のときから、学校の先生が家庭教育のコンサルタントになる、そういうシステムは、いったいできないだろうか。

これは波多野先生が強調しておられ、また実際にその努力をしていらっしゃるんですが、学校は学校、家庭は家庭という具合に、一つのしつけの切り売りみたいになっていますが、私は、人間に対しては、そんなばらばらにありうるものじゃないんじゃないかということをしきりに考えるんです。

たしかに、終戦後から今日までの、教育に対する反省というものは、一般にでてきたわけで、したがって、この問題が起こってきたと思いますね。

親が精一杯生きるのが最大のしつけ

矢野　そんな点で犬塚さん、ＰＴＡなんかごらんになり、きょうの諸先生のお話をお聞きになって、おかあさんの立場として、いままでのあり方よりもこういうものができりゃいいとか、こういうふうに学校でやってくれりゃいいとか、なにかご希望なりご感想はございませんか。

犬塚　私いま先生方のお話をうかがっておりまして、子どもを育ててきたというよりは、ひとりでに育ったというような感じをもったんでございます(笑声)。

矢野　それがいちばんいい。さっきの話のように自然で‥‥。

犬塚　ただいま先生方から、いろいろと有益なお話をうかがっておりま

して、５人の子の母親の私は自分のしてきたことに自信を持ったり、冷汗を流したりして、よくまあここまで育った、と思っているわけでございます。

長男が生まれました時、私が少しばかり、教育というものをかじっていましたので、この子を理想的に育てようという意気ごみで育児の本など波多野先生のお書きになられた「少年期」とか心理学の本などで勉強させていただきましたが、両親がいっしょでしたし、主人の兄弟や雇人など大家族でして、次々と子どもが生まれ、戦争が始まったりで、思うようにならないことばかりでございました。

今ふりかえって見ますと、子どものしつけなど何一つできておりませんで恥ずかしく思いますが、今のところ子どもが皆すなおに、のびのびと育っておりますのは一つには、田園調布という環境のおかげだと思います。

それは、どの子にもいえることですが、お友達に非常に恵まれているんです。それにつながる家庭、学校、先生、と社会に出るまで、その感化が非常に大きいということを、いまさらのように、ありがたく、感謝しております。

もう一つは、私ども両親が未熟で、子どもを教育するなどという資格はありませんが、自分達の分野で一生懸命に生きてきたということじゃないかと思います。私達の子どもだから決して横道にそれるような子になるはずがないという信念みたいなものを持っています。

自分のことばかり申しあげましたが、いろいろ勉強させていただき、ありがとうございました。

「お手伝い」論再考

波多野　いま滑川さんが、子どもに家庭の中でそれぞれの役割を与えないで、お手伝いさせるというやり方はいけないとおっしゃいましたが、私もほんとにそうだと思います。でも、この「お手伝い」という言葉にむしろ問題があるのではないでしょうか。幼稚園のときから「おうちの

お手伝いをしましょう」といういい方でもって始まるんでございますね。家族の一員としてなにかさせるのに「お手伝い」という言葉が日本の家庭のなかにはいっている。このコトバをなにか変えなきゃ、子どもなりの役割をするというしつけはできにくいのじゃありませんか。お手伝いというのは「ほんとはしなくてもいいことを手伝う」ということを意味します。そうじゃなく、家族の一員としてあるべきことをやるんですのに、お手伝いする、させるという、うっかりした言葉がつかわれているところに、やっぱり日本の家庭生活の中での子どもの取扱い方というものができていないんじゃないかと思います。子どもの人格を認めず、子どもなりに一人前として扱うということをしなかった時代の名残りでしょうね。

矢野　「勉強しましょう」というんじゃいけないですか。

波多野　さあ‥‥(笑声)。これに適当なコトバが生まれたら、このしつけも、もっとちゃんとできるのでしょうがね。ほんやく調でいえば、「あなたのすべき役割をしなさい」ということになります。けれどもこれもへんですね。お手伝いといえば、子どもが小さいから、まだしなくてもいいのだけれども、やって頂戴という意味になりますが、それをいう親の気持の中には、むしろやらせてやるという気持、それが強くて、ほんとうに手伝わせるというつもりはあまりないように思いますね。

青井　「お手伝い」というのは、余分なことをすることですね。「とくにやってやる」というんですから。

波多野　そういう考え方が新教育の時代になっても、依然として根本にはいってやしないかということを、私たちは、ここであらためて考えなければいけないんじゃないでしょうか。

「お手伝い」を「勉強」になおしたら

矢野　いまのお手伝いの話、たしかに「手伝う」という観念は、なにか変えたほうがいいと思うんですが、能力からいって、家庭のなかにおける自分のシェアー(持分)をもつところまで

いかれない。しかし、それを勉強していかなきゃならないというものがあるんじゃないか。「それはあなたの勉強なんだから」といって‥‥いわゆる「行じて学す」といいますが‥‥。

どうも人間というものは、すべてのことが、たとえばいま歩いているのだって、生まれてからのトレーニングできているんだから、生理的にはトレーニングしていかなきゃいけない。そのトレーニングをどこでやるかということになると、家庭のなかでやっていく。それで日本のしつけというものは、だいたい芸ごとでもそうですけれども、徒弟見習いなんですね。みんなそこへ修業にはいる。桶屋なら桶屋へはいって、実際に自分のからだに覚えさせる。はじめから、ある部分ではシェアーだけれども、シェアーばかりでもない。なにか真似していかなければ勉強できないというものも、しつけにはいるんじゃないかと思うんです。そうすると子どもに、たとえば「手伝え」というのは、親のほうからは、善意でそういっている点があるんですね。

滑川　勉強させてやろうという善意がはたらきますよ。

矢野　「これはおまえ自身のために勉強しなさい」、「やってみなさい」、というふうに子どもに通じれば、また違った意味にもなるものがあるんじゃないか。

また人間というものには、単に口からいっただけじゃ、とうていしつけられないものが、多分にあるんだということも必要なんだから、なにかそのへんに、新しい表現てものがいるんじゃないですか。

波多野　そうなんです。勉強ということを、母親がちゃんと知っていれば、へたでもなんでも、そこでやらせなきゃならない。ところが、やらせて面倒くさくなると、手を出しますでしょう。だからまったくのお手伝いになってしまう。それを勉強させるんだったら、手を出してはいけないわけなんです。

矢野　そこが外国人はしっかりしてますね。根気よく、ちゃんと、シス

テマティック（体系的）にやっていくが、日本の母親は気まぐれだから、あるときには自分で全部やってしまったりする。これもしつけのやり方の一つの基準になるんじゃないかと思うんですね。

青井　ちょうどそれに合った言葉がないということは、やはり一つの問題点ですね。日本でそれができなかったという意味で……。

観念とことば——コミュニティにもいい日本語がない

矢野　だいたいコミュニティという日本語がないんですね。この研究所をつくるときに、どういう名前にするか……英語では「Community Study Foundation」で、外国人にはよくわかる。それを財団法人の名にしようと思ったけれども、日本語がない。それでとうとう「地域社会」といったけれども「地域社会」では非常に狭いんで、コミュニティというのは地域だけじゃない。

波多野　「地域社会」というのも変な気がしますが、いまそれしかないですから……。

矢野　これも私が知っている範囲においては、終戦後、日本の教育をやり変えて、コミュニティに関する教育を、社会科のなかでやれという連合軍のいいつけで、小学校、中学校では地域社会の時間というものができたのでしょう。

それがどうも地方へいくと、ある場合には逆効果になってくるのではないか、という心配もでて来ます。自分の村だけのことは、ばかにくわしくなるが、よそに対しては非常に排他的になって、いい意味での愛村心ではなくて、自分は自分の村だけのことを考える、というような狭いものにもなりかねない。

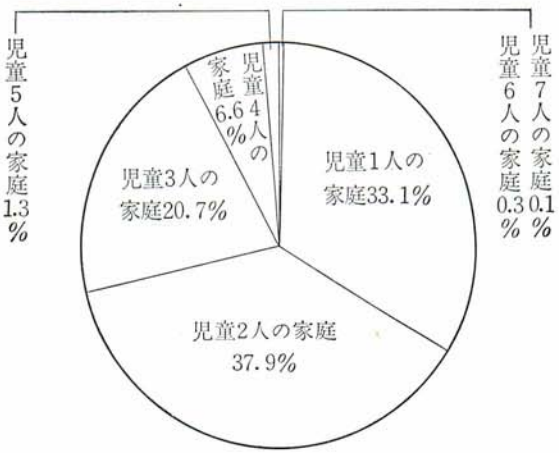
したがってコミュニティを「地域社会」という言葉で現わすことは、はなはだおもしろくないんだけれども、そうかといってコミュニティ研究所と、カナでもって英語の名を日本の財団法人につけるということもおかしい。それで困ったんですが、考えてみると、日本人にはコミュニティとい

う観念がない。だから言葉がないということなのでしょう。

同じような問題はしつけに関してもあって、しつけといままでの常識や慣習などとの関係も大きな問題で、きょう予定していた、言葉や生活習慣としつけの問題というのは、時間の関係で割愛しましたけれども、つまりこれをねらったのでした。親が使っている言葉の意味と、子どもが感じるものと非常に違う。そこの表現の仕方にくい違いがあり、習慣にくい違いがあるという問題が、日本はほかの国よりひどいんじゃないかと思われます。しかし、これも今後はだんだんに薄れていくと思います。

どうもお話をうかがっていると、おもしろいのできりがないんでございますが、いろいろな点で、まことに蘊蓄のあるお話をうかがいまして、ありがとうございました。

児童数別家庭の割合い



付　　表

「全国家庭児童調査結果報告書」 厚生省児童局、昭和39年2月刊より

調査実施は昭和38年7月1日

世帯と環境

① 全国の世帯の62％が「児童のいる世帯」である。5世帯のうち3世帯に当たる。

② 児童のいる家庭の三分の一は、児童1人の家庭であるが、一番多いのは児童2人の家庭で38％をしめる。

③ 児童のいる家庭の6％は母子家庭である。その数は969,000家庭と推計される。

④ 児童のいる家庭の1％は父のみで母またはこれに代る者さえいない父子家庭である。その数は148,000家庭と推計される。

⑤ 児童のいる家庭の34％は「児童の遊び場がない」と訴えている。

自分の家に十分の庭がある	近所に空地がある	近くに児童公園がある	近くに公園がある	その他遊び場あり	遊び場がない	不明	計
18.0%	21.6%	9.2%	3.9%	10.9%	34.3%	2.2%	100%

⑥ 全児童の26％は、自分達の遊び場を求め、11％は遊び場の設備等の改善を求め、遊び場について満足している児童は2％である。

⑦ 「良い環境にいる」という児童は全児童の10%、「悪い環境にいる」という児童は17%である。

児童の保護者

① 保護者と児童の続柄をみると、父は93%、母6%、祖父母等1%となる。

② 保護者の6%は、調査日現在、何らかの疾患にかかっている。特に不就業家庭に多く、日雇労務者家庭がこれにつぐ。

③ 疾患にかかっている保護者は、低収入者ほど多くなっている。

（それぞれの年収階層の保護者を100として、疾患にかかっている保護者の%）

0円	6万円未満	6万—12万未満	12万—18万未満	18万—24万未満	24万—36万未満	36万—48万未満	48万—60万未満	60万—80万未満	80万—100万未満	100万円以上	総数
% 31.0	% 21.0	% 14.1	% 11.6	% 5.7	% 3.7	% 3.2	% 3.5	% 2.8	% 2.9	% 5.0	% 6.1

児童の状況—特に問題の児童

① 父母ともいる児童は94%である。

父母あり	父なし母あり	父あり母なし	父母ともなし	計
93.7%	4.9%	1.1%	0.4%	100%

② 児童の3%は現在、なんらかの疾患にかかっている。

③ 高校進学率は70%、定時制も含めると74%と推算される。

④ 全児童の15％は、学校以外で何らかの教育をうけている。

⑤ 学校以外で教育をうけているものは男子はその12.6％、女子は16.2％で、女子の割合いが多い。

⑥ 約133.000人の幼児（男子48.000人、女子85.000人）は、保育所、幼稚園以外で先生について情操教育をうけている。

⑦ 小学校以上の児童の12％は、健全育成の各種団体に加入している。男子はその12.3％、女子はその12.2％である。

⑧ 言語障害のある児童は全児童の0.7％、約233.000人、このうち吃音児は95.000人である。

⑨ 視覚に障害のある児童は全児童の1.5％、聴覚に障害のある児童は0.5％である。

⑩ 肢体不自由児は全児童の0.7％、227.000人と推計される。

⑪ 歩行不能児は全児童の0.4％である。

⑫ 60人に1人の異常習癖児がいる（1.6％、528.000人）
（失禁、夜尿、異食、不眠、遺尿など）

⑬ 児童540人に1人の反社会的行為の児童がいる（0.18％）
（浮浪、暴行、弄火、放火、虚言、金品持出し、家出、窃盗など）

⑭ 36人に1人の非社会的行為の児童がいる（2.69％）
（かんしゃく、泣きむし、わがまま、強情、反抗、内気、興味喪失、落つきなしなど）

働く母

① 1日平均1時間以上、家事以外の労働に従事する母は、すべての母の55％である。そのうち22.2％は農業の家族従業者で、7.6％は他の事業の家族従事者である。

② 母の35％は、自分が働かないと生活が困ると考えて、家事以外の労働に従事している。

	自分の他に働く人がいないから	不足するから自分が働かないと家庭の収入が	は出来るが、更に収入をえたい自分が働かなくても一応の生活	できるが、更に収入をえたい自分が働かなくても十分生活は	その他の理由で働いている	働いていない	不明
母の総数を100として	% 9.1	% 25.8	% 9.9	% 2.6	% 6.0	% 44.8	% 1.7
働く母を100として	% 16.6	% 46.8	% 18.0	% 4.7	% 10.8		% 3.1

③ 母が働かなければ生活できない家庭の児童は全児童の37％、1,188万9,000人と推計される。

④ 働く母の12％は現在、何らかの疾患にかかっている。

編 集 委 員
（五十音順）

青 井 和 夫
白 石 清
並 木 正 吉
日 笠 端
宮 坂 忠 夫

地域社会刊行物 No. 5

コミュニティ 5——家庭のしつけとコミュニティ——

昭和40年 6 月 1 日 第1刷発行 定価 200 円
昭和43年 4 月10日 第2刷発行
昭和48年 1 月15日 第3刷発行

改訂旗価各号300円

編 集 財団法人 地域社会研究所
郵便番号 100
東京都千代田区有楽町1の9
第一生命館
電話（216）1211（大代表）
振替 東京 137404

発 行 株式会社 国 勢 社
東京都品川区西五反田 2-19-3
五反田第一生命ビル
電話（492）5878
振替 東京 376

印 刷 大日本印刷株式会社榎町工場

地域社会研究所について

この財団法人は、近代的かつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和38年10月10日に設立されました。

その事業としては、

1. 近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究
2. 近代的地域社会観念の啓発と普及
3. 近代的地域社会を形成する各分野の調査研究
4. 前記の諸事業についての実験と指導
5. 地域社会についての書籍、パンフレットの刊行

などを行ないます。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい課題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後、事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の顧問ならびに役員は、つぎのとおりであります。

顧　問　　（五十音順・敬称略）

石坂　泰三

東畑　精一　　農学博士・学士院会員

常務理事

白石　清	第一生命監査役

理　事

磯村　英一	文学博士・東洋大学教授
氏家　寿子	日本女子大学名誉教授
緒方　信一	日本育英会会長
高山　英華	工学博士・東京大学名誉教授
時実　利彦	医学博士・京都大学教授
並木　正吉	農林省農業総合研究所計画部長
福武　直	文学博士・東京大学教授
矢田　恒久	第一生命取締役会長
山口　正義	医学博士・結核予防会理事長・労働衛生研究所長

監　事

酒井杏之助	第一勧業銀行相談役
村上　兼次	財団法人第一住宅建設協会理事長

評議員

青井　和夫	東京大学教授
東　俊郎	医学博士・順天堂大学教授
岡部　良雄	第一生命専務取締役
勝沼　晴雄	医学博士・東京大学教授
田辺　定義	東京市政調査会顧問
内藤寿七郎	医学博士・愛育研究所副所長・愛育病院長
中根　千枝	東京大学教授
日笠　端	工学博士・東京大学教授
藤田　たき	津田塾大学学長
松方　三郎	共同通信社顧問
宮坂　忠夫	医学博士・東京大学教授
湯沢　雍彦	お茶の水女子大学助教授

（このほかに，理事，監事も評議員をかねる）

出版案内

購読ご希望のかたは，誌代を直接郵便振替（東京137404番，財団法人地域社会研究所）でご送金ください。また，継続して購読されるかたは，1年分800円（年間4冊発行，1冊200円）をまとめてご送金されるとご便利です。（本誌の送料当所負担）

コミュニティ

（A5判・約110頁）

既刊	第1号	コミュニティのあり方	（200円）
	第2号	新しい農村生活	（〃）
	第3号	地域社会と婦人	（〃）
	第4号	都市生活とコミュニティ	（〃）
	第5号	家庭のしつけとコミュニティ	（〃）
	第6号	老人問題とコミュニティ	（〃）
	第7号	コミュニティと青少年	（〃）
	第8号	日本人のつきあい	（〃）
	第9号	家族と親族	（〃）
	第10号	健全な子どもの育成	（〃）
	第11号	今日の教育を考える	（〃）
	第12号	レクリエーションとスポーツ	（〃）
	第13号	健康なまち	（〃）
	第14号	交通安全とコミュニティ	（〃）
	第15号	日本人のことばと話し方	（〃）
	第16号	テレビと家庭生活	（〃）
	第17号	家庭婦人の学習	（〃）
	第18号	公共の場におけるマナー	（〃）
	第19号	精神衛生	（〃）
	第20号	ヨーロッパを考える	（〃）
	第21号	公衆衛生	（〃）
	第22号	千代田地区保健活動10年の総括	（〃）
	第23号	創造的農業者	（〃）

改訂価格各号300円

改訂頒価各号300円

第24号	団地生活を考える	(200円)
第25号	食生活を考える	(〃)
第26号	日本人の暮しと住まい	(〃)
第27号	地方都市とコミュニティ	(〃)
第28号	わがコミュニティ	(〃)
第29号	家族はこれからどうなるか	(〃)
第30号	自然と人間	(〃)
第31号	子どもの遊び場	(〃)
第32号	コミュニティと広場	(〃)
第33号	乗物と人間	(〃)
第34号	ことわざとコミュニティ	(〃)

高年齢を生きる

(A5判・約110頁)

改訂頒価各号300円

既刊	第1号	高年齢人口の問題点	(200円)
	第2号	高年齢者と家族	(〃)

コミュニティ叢書

No. 1　会社従業員の生活と意識

——第一生命従業員調査——

編著者・青井和夫（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A4判・184頁・頒布価格850円

○近郊農業地帯（神奈川県足柄上郡大井町）に社屋移転に際し第一生命の従業員全員と配偶者を対象に生活構造，態度，意識，希望等をまとめたもので研究者はもちろん，地方進出を企図する企業および受け入れ側にとっての資料。調査集計表多数集録。

No. 2　大井町—地域社会の構造と展開

編著者・福武直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B５判・720頁・頒布価格2,500円

○第一生命の理想的なまちづくりの構想による移転とともに急速に都市化が進みつつある同地域における経済・社会・政治などの姿を把握分析したもので，今日各方面の関心事となっている農村の都市化・地域開発計画などの参考資料。

No. 3　都市生活者の生活圏行動
——第一生命従業員調査——

編著者・高山英華（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A４判・188頁・頒布価格1,600円

○第一生命の従業員とその家族を対象に４回にわたる生活行動調査の結果をまとめた，いわゆる東京のホワイトカラー層世帯の行動パターンを示したもので，大都市や近郊地域における施策に対する参考資料。既刊 No. 1 の姉妹編として刊行。職員行動地図および調査集計表多数集録。

No. 4　大井町開発基本計画

編著者・日笠端（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／A４判・128頁・頒布価格2,000円

○最近とみに市街化が進んでいる神奈川県大井町を対象に，コミュニティ・プランニングの考え方をいかに都市計画のなかに折込むかという課題を研究してまとめたもの。農村から都市へ脱皮しようとする地域における施策に対する参考資料。図・表多数集録。

No. 5　恒心会員の歩み

——岡山県の創造的農業者——

編著者・並木正吉（農林省農業総合研究所計画部長）／発行・地域社会研究所／取扱・国勢社／B５判・220頁・頒布価格1,500円

○かつて表彰をうけた岡山県下の優秀な若き農業者たちのその後10数年にわたる経営の変化のかずかずや地域に対する活動を詳しく追跡し，その業績を広い視野にたって評価したもの。類書がまれなのみならず，困難な転期にたつわが国の農民・農村・農業の将来に対する資料として薦める。

No. 6　農漁村社会の展開構造

——秋田県由利郡金浦町——

編著者・福武直（東京大学教授）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B５判・380頁・頒布価格2,800円

○東北の日本海沿いの農漁村金浦町を対象に，産業経済・社会・政治の諸構造をはじめ生活改善・教育など広範にわたり，歴史的過程から現状の問題点にふれそれらを明らかにし，学問研究の上で大きく寄与するのみならず，こんにち揺れうごく農漁村のありかたに対しても示唆となる参考資料。

No. 7　地域社会の形成と教育の問題

——神奈川県大井町——

編著者・松原治郎（東京大学助教授）小野浩（武蔵大学講師）／発行・地域社会研究所／発売・東京大学出版会／B5判・267頁・頒布価格2,400円

○既刊No. 2で調査分析した神奈川県大井町のその後の社会構造の変化，とくに新しいコミュニティの動向のなかで，教育の問題のもつ意味と展開過程を実態調査に基づいてまとめたもの。実践的な施策にとって大いに役立つのみならず，地域社会の教育問題に関する学問研究上の意義も大きい。

表紙のブックマークＣＳＦは当地域社会研究所の英語名 The Community Study Foundation の頭文字をとった略称です。

C S F